松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈6〉

二軒在家東光寺遺跡

1997

松井田町埋蔵文化財調査会

序　　文

二軒在家東光寺遺跡は、松井田町の住宅事情改善のための施策として計画された宅地分譲事業に先立つ発掘調査により発見されたものです。ここでは縄文時代中期の住居跡や土坑、または歴史時代とされる奈良～平安時代以降に属する掘立柱建物跡や溝跡、集石部などが検出されました。

現在、発掘調査の９割以上は開発事業に伴うものであり、松井田町においても全てがこのケースでありますが、それ故に生じる文化財保護と開発の推進の問題は古くて新しい課題と言えます。しかしながら、過去の歴史を踏まえて未来を創造してゆくことは、今を生きる我々にとっての指針となり、「文化」と呼ばれる我々の営みの同一線上にあると考えます。今回の調査で得られた資料が地域史解明の一資料として、様々な教育の場を通じて活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり快く協力いただいた群馬西部土地開発公社ならびに地元の方々、また寒風吹く中で調査に従事していただいた参加者の皆様に、厚く感謝の意を表したいと存じます。

平成９年３月

松井田町埋蔵文化財調査会
会　長　武田　　弘

例　　言

1．本書は、群馬西部土地開発公社松井田事務所による宅地造成に伴う二軒在家東光寺遺跡の発掘調査報告書である。
2．本遺跡は、群馬県碓氷郡松井田町大字二軒在家字東光寺686-1他に所在し、調査面積は3,750㎡、調査期間は1996年１月16日～1996年２月12日までを要した。
3．調査は、松井田町埋蔵文化財調査会から委託を受けて山武考古学研究所が実施し、同所調査研究員の小村正之が担当した。
4．本書の執筆・編集は山武考古学研究所が行い、小村が担当、石田利子・小川悦子・樺沢美枝の協力を得た。
5．調査に際し以下の諸氏・諸機関にご協力をいただいた。（敬称略）
　東日本重機・開成測量・新成田総合社
6．調査参加者は以下の通りである。（敬称略）
　岩井ひで・打越　進・金谷清一郎・金子潤子・後藤昇二・後藤ふじ子・桜井きん・桜井慎三・桜井敬一・杉木はま子・土屋きみえ・中山寅雄・中澤清隆・増田とよみ・山越梅子・吉本律子・萩原南海子・岩井さよ子・大山浩子・桜井れい・高橋千代子・勅使河原酉造

凡　　例

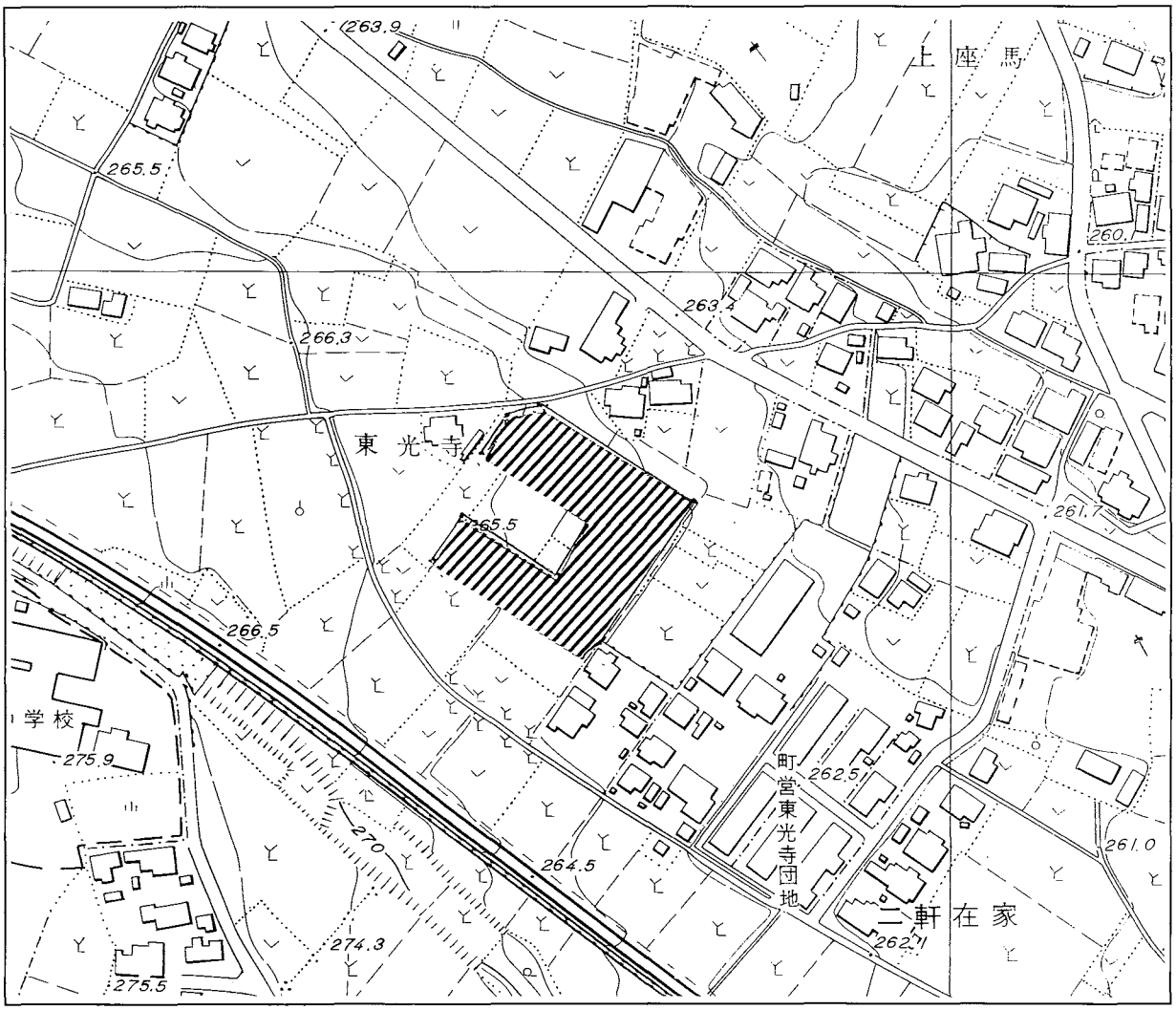
1．第１図は松井田町発行2,500分の１「No.27」、第２図は日本国土地理院発行２万５千分の１地形図「松井田」、第３図は松井田町発行５千分の１「No.15」、抄録図は日本国土地理院発行５万分の１地形図「富岡」、写真図版１は日本国土地理院発行２万５千分の１空中写真を使用した。
2．図中の方位は座標北、Ｌは標高を示す。
3．遺構番号のうち、３号住居跡・４号住居跡は遺物の注記はあるが遺構として認められないため、本報告書では遺構外扱いとした。また６・７号住居跡は、５号住居跡と同一のため欠番となった。

目　　次

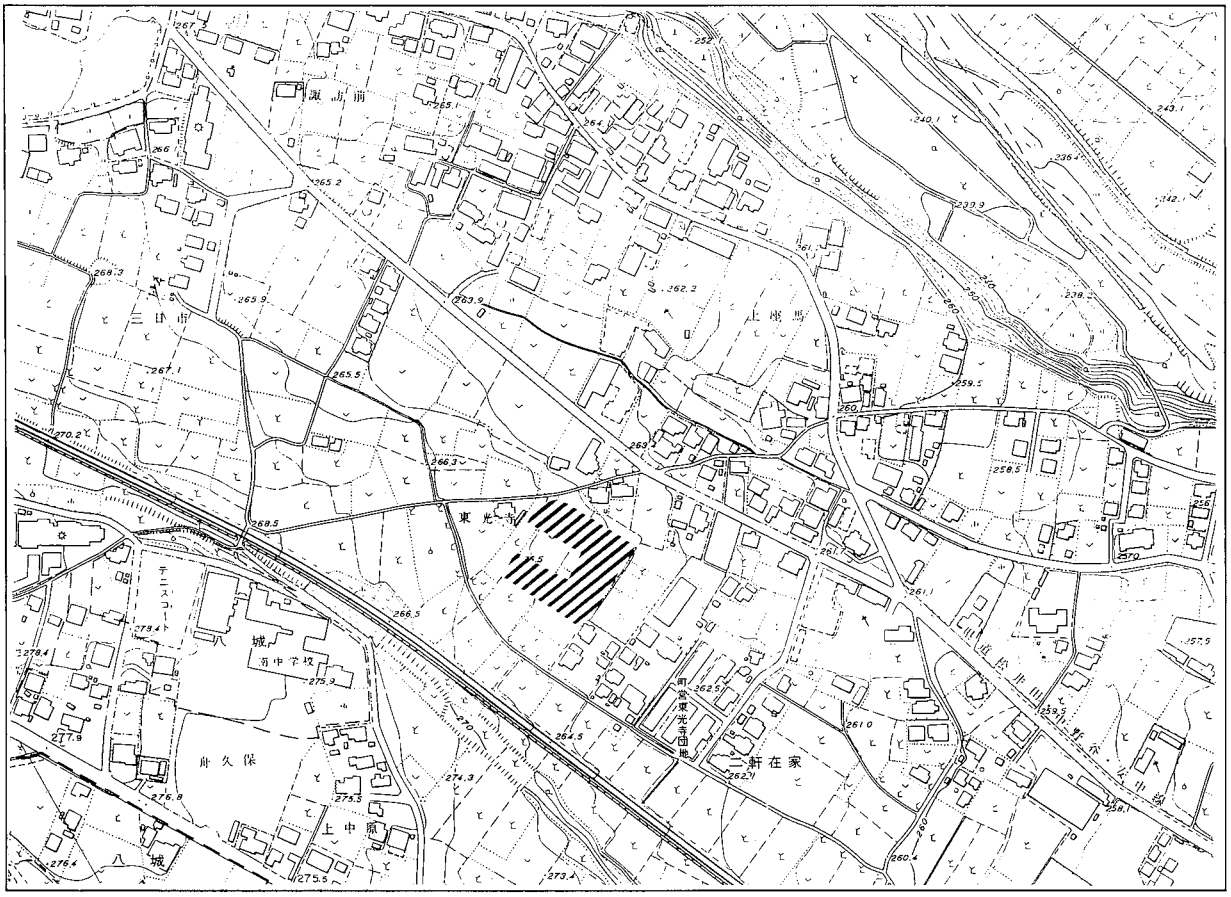
序文
例言
凡例
第１章　発掘調査に至る経緯……１
第２章　環　境……３
第３章　調査方法・経過……３
第４章　遺構・遺物……５
第５章　まとめ……20
抄録
写真図版

第１章　発掘調査に至る経緯

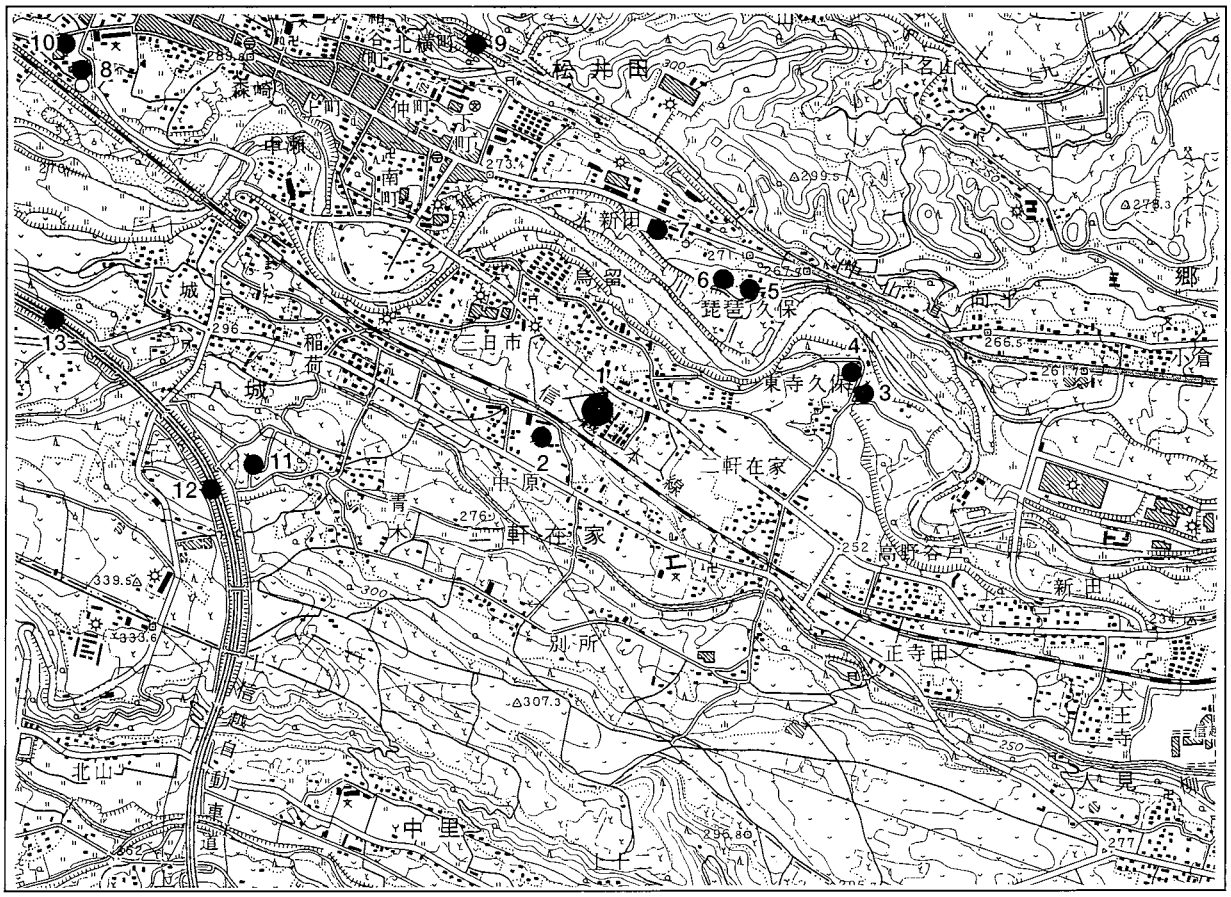
松井田町では若年層を中心とした人口流出が続いているが、主な要因として住宅の不足が挙げられてきた。また町内への新企業進出にともなう従業者の住宅地の不足も表面化してきている。これらの住宅地需要に応え、高齢化と人口流出に歯止めをかけるべく、町の総合計画、整備計画に基づき、群馬西部土地開発公社の事業として住宅地分譲計画が作成された。当該地の埋蔵文化財の状況について、公社担当である町企画課と教育委員会との間で最初の協議が平成７年４月に行われた。以後、同月16日の分布調査及び９月の試掘調査の結果、区域内において縄文と平安期の遺構・遺物が確認され、周知の遺跡となった。ここにおいて埋蔵文化財保護のための協議が行われ、開発計画の変更は不可とされたため、発掘調査を実施して記録保存の措置を講じることとなった。試掘調査の結果から開発面積の４割弱が遺跡範囲と考えられ、3,750㎡を調査対象面積とした。調査は町教育委員会に事務局を置く松井田町埋蔵文化財調査会が実施することとし、平成８年１月８日付で群馬西部土地開発公社と松井田町埋蔵文化財調査会の間に発掘調査委託契約が締結された。なお、実際の調査は公社の承諾を得、調査会が民間の埋蔵文化財調査機関である山武考古学研究所に業務を再委託して実施した。また、整理作業は同年８月20日付で契約を締結、同機関にて作業が進められた。



第１図　調査区設定図（Ｓ＝１／2,500）



第２図　遺跡位置図（Ｓ＝１／5,000）



第３図　二軒在家東光寺遺跡と周辺遺跡位置図（国土地理院２万５千分の１『松井田』）

第2章　環　境

第1節　地理的環境

松井田町は、群馬県の南西部に位置する。南は下仁田町、妙義町、東は安中市、北は倉淵村、西は碓氷峠・妙義山をはさみ長野県軽井沢町に接している。町の地勢は山がちで、碓氷川が町の南寄りのところを西から東へ流れている。碓氷川水系や高田川水系などによって開析された谷筋や河岸段丘上に集落が点在している。本遺跡も碓氷川の下位河岸段丘上にあり、上信越道松井田妙義インターチェンジから東に約3.3㎞、ＪＲ信越線松井田駅から南東へ約2.7㎞のところである。現地表面で、標高264～265ｍである。

第2節　歴史的環境

本遺跡周辺は、碓氷川・高田碓氷川や各々の支流域の谷筋に沿って縄文時代以降の遺跡が多く存在する。特に河岸段丘上の平坦面には、密度の濃い分布を示している。

上信越自動車道の建設にともない、富岡市の田篠中原・中高瀬観音山、下仁田町の杣瀬・下鎌田、妙義町の古立東山・古立中村・八木連狸沢・八木連荒畑などの遺跡が発掘調査された。松井田町においても行田大道北・行田梅木平・新堀東源ヶ原・五料平・五料野ヶ久保・五料稲荷谷戸・横川大林・西野牧小山平などの大規模な遺跡が発掘調査されている。また他にも松井田工業団地・土塩下原・下増田天神原・八城赤羽根・人見北原・国衙・五料山岸・入山峠・二軒在家二本杉などの遺跡や遺跡群が調査されている。いずれの遺跡も各時代のそれぞれの人々の営みの跡を窺うことができる。

周辺の遺跡一覧

1．二軒在家東光寺遺跡	8．松井田6号墳
2．西横野5号墳	9．愛宕山遺跡
3．西横野21号墳	10．新堀社宮司遺跡
4．西横野20号墳	11．二軒在家二本杉遺跡
5．松井田2号墳	12．八城二本杉東遺跡
6．松井田3号墳	13．行田大道北遺跡
7．松井田5号墳	

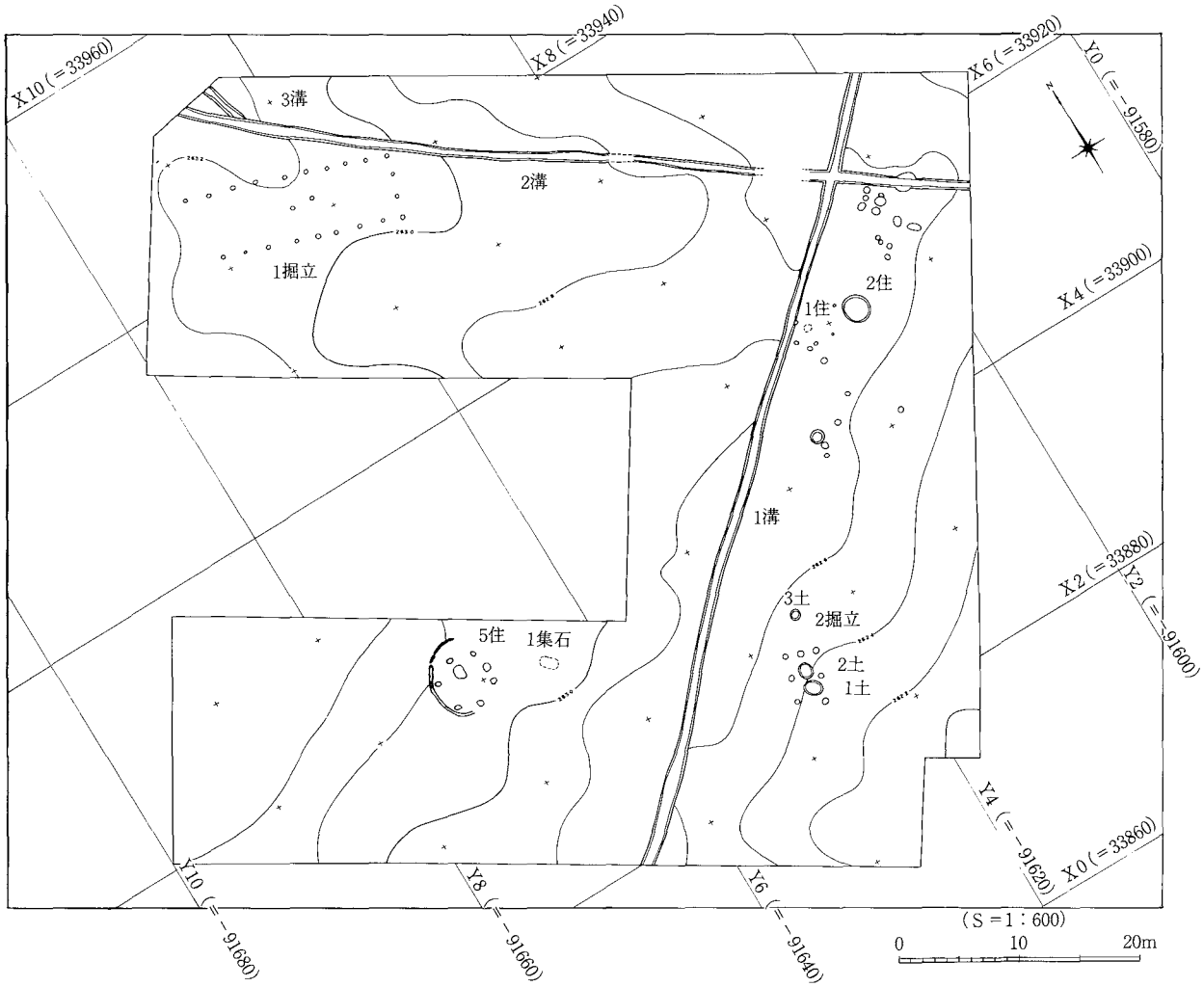
第3章　調査方法・経過

第1節　調査方法

表土は、確認面までパワーショベルを用いて除去した。遺構検出はジョレンを用いた。遺構の掘り下げは、その堆積状況を観察するため、帯状のベルトを残すかもしくは半截しながら、園芸用の移植ごてを用いて行った。記録は写真と実測図面によった。

写真は35㎜のモノクロとカラーリバーサルおよび6×7モノクロを用いた。実測は遺構単体の図面については1／20の縮尺を基準として、土層断面図（セクション）・遺物分布図・完掘平面図・完掘断面図（エレベーション）を作成した。また、カマドなどについては別に1／10の微細図を、全体図は1／200の縮尺で作成した。その等高線は20㎝毎に入れた。

測量用の基準杭は、国家座標第Ⅸ系を用いた。Ｘ＝33860をＸ０として、南から北へ10ｍ毎にＸ１・Ｘ２・Ｘ３‥‥と仮称した。またＹ＝－91580をＹ０として、東から西へ10ｍ毎にＹ１・Ｙ２・Ｙ３‥‥と仮称した。



第4図　調査区全体図

第2節　調査経過

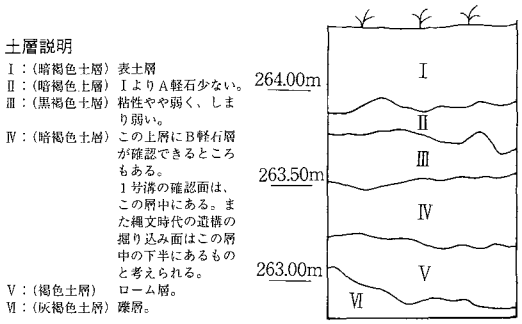
1996年

1月　16日、挨拶廻り、調査区設定、重機の打ち合わせ、プレハブの設置を行う。17日、発掘機材・トイレを搬入する。重機による整地・表土除去作業を開始する（～30日）。22日、遺構検出作業および遺構調査を開始する。

2月　2日、調査区内に測量用の基準杭を設定する。22日、調査区内全体測量を行う（～23日）。26日航空写真撮影のための全体清掃作業を行う。27日、航空写真撮影を行う。28日、遺構調査を終了する。29日、発掘機材を搬出し、発掘調査の全工程を終了する。

第3節　基本層序

本遺跡の標準堆積土層は、関東ローム層の厚さが薄く、そこが川底であったことを示す礫層が見られる。ローム層の上は黒色土層となり、遺構の掘り込みはこの層中にあると考えられるが、断面観察を用いても遺構の覆土と掘り込み面の層との違いを確認することは困難であった。特に縄文時代においては、ロームまで下げてかろうじて遺構の平面プランが確認できた。



第5図　標準堆積土層図

第４章　遺構・遺物

検出された遺構は竪穴式住居跡３軒、掘立柱建物跡３棟、土坑14基、溝状遺構３条・集石遺構１基であった。出土遺物は大型整理箱で６箱である。

第１節　縄文時代

本遺跡で主体を占める時代である。出土遺物から、時間差はそれほど見られず、極めて限定された時期にわずかな生活の痕跡を残していたようである。

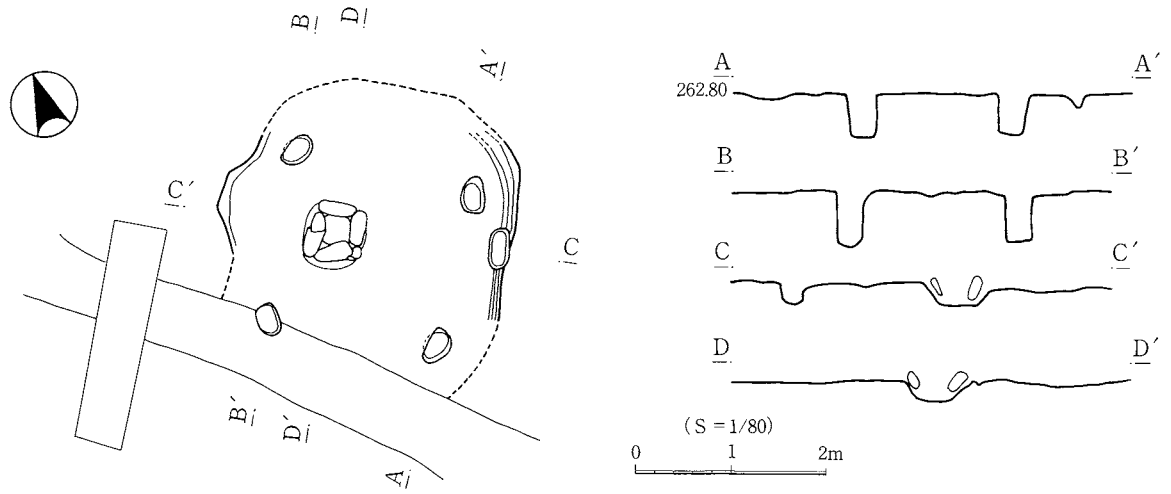
竪穴式住居跡３軒が検出されている。確認面はローム層上面である。いずれも掘り込み面がはっきり確認されなかった。また土坑では１基のみ遺物が出土している。遺構に伴わない遺物は全体の７割を占め、遺構に伴う遺物は、そのほとんどが５号住居跡からのものである。

１．１号住居跡

検出位置：Ｘ５－Ｙ３グリッド内、標高262.60ｍ／平面プラン：直径３ｍ以上のほぼ円形？／覆土：暗褐色～黒褐色土／床面：炉周辺に若干硬い面が残っていた。／炉跡：中央西よりに70cmの掘り方、その中に川原石４石を用いて60cm四方の炉を設ける。中の燃焼部は30cm四方、深さ30cmである。／柱穴：４基検出。いずれも40cm×30cmの不整形に近い楕円形。床面からの深さ50cm。／ピット：東側壁よりに40cm×30cmの楕円形のピット１基検出。／周溝：東側壁よりに長さ1.8ｍ、幅15cm、深さ15cm／遺存状況：壁の立ち上りは東側にかろうじて残っていた。南側は１号溝によって切られていた。

出土遺物：明らかにともなう遺物は出土しなかった。

所見：試掘段階でその存在がわかっていた住居跡である。遺存状況が悪く、出土遺物がないため、営まれた時期ははっきりしないが、付近の遺構外出土遺物（外－１～４）がいずれも加曽利Ｅ３式もしくは曽利Ⅲ式であるところから、この時期の所産である可能性が高いといえる。また炉の形態もこの地方の縄文時代中期のものであることを示している。



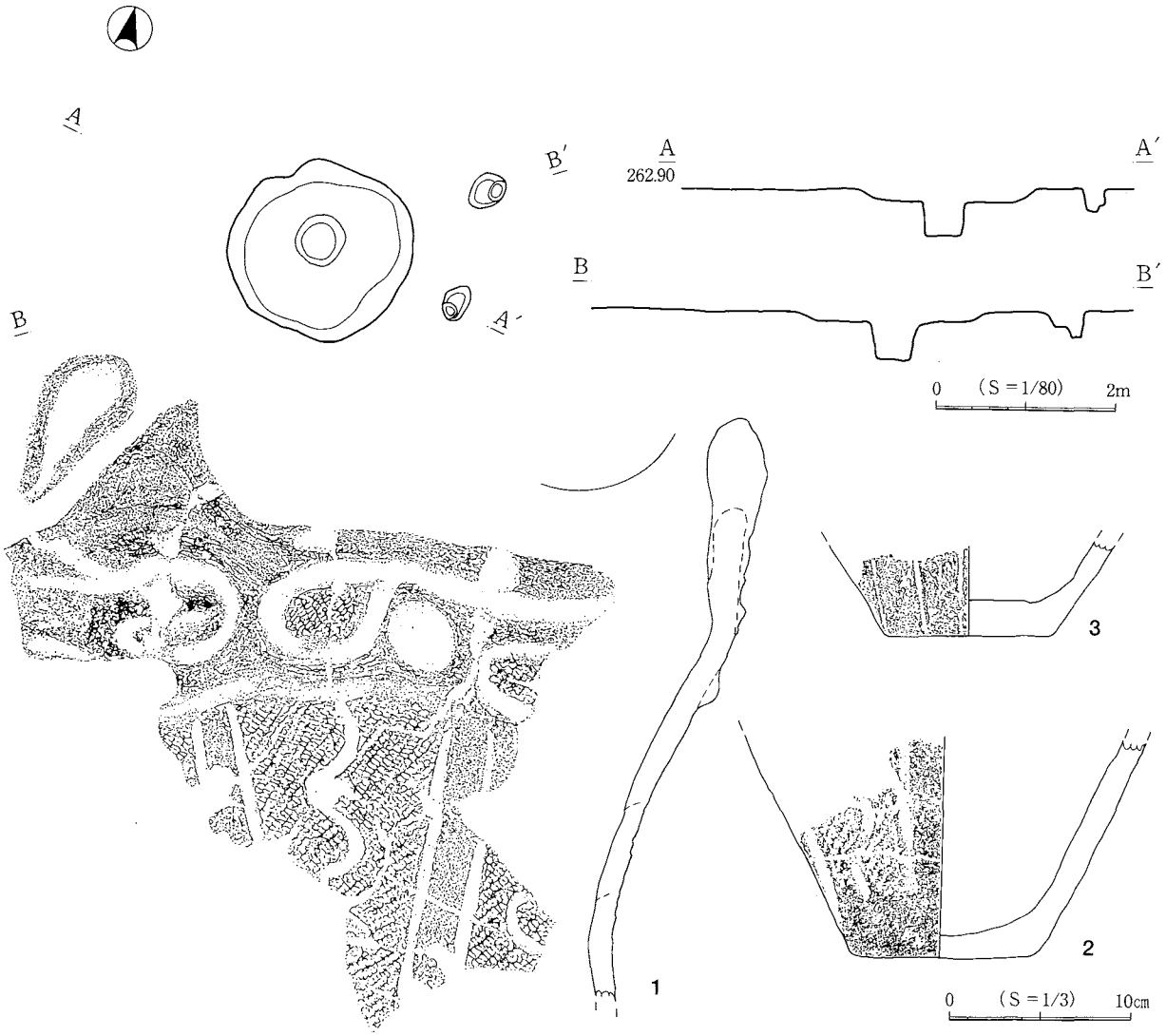
第６図　１号住居跡遺構図

2．２号住居跡

検出位置：Ｘ４－Ｙ２～Ｘ５－Ｙ２グリッドにまたがる。標高262.60ｍ／平面プラン：不明、直径2.2ｍ、深さ10cmの円形の掘り込みと柱穴と思われるピット２基によりなる。／床面：不明瞭／覆土：暗褐色／炉跡：円形の掘り込みのほぼ中央に、直径60cm、深さ40cmの掘り方を有す。内部からは１の土器と焼土粒子および炭化粒子が検出された。おそらく埋甕炉であると考えられる。／柱穴：２基？検出、いずれも40cm×30cmの不整形に近い楕円形、床面からの深さ８cm、その中に20cm×10cm、深さ10cmのピットがある。／周溝：検出されなかった。／遺存状況：壁の立ち上りは全く検出されなかった。

出土遺物：加曽利Ｅ３式中葉段階と思われる土器が出土している。１は胴部に磨消縄文帯があるが、それは上の方で逆Ｕ字形につながらず、また他に胴部縄文帯中に蛇行する沈線を垂下させる。頸部無文帯は見当たらず、口縁部は渦巻状文と楕円区画が存在、その中には縄文が充填される。

所見：遺構の形態が不明瞭であるが、埋甕炉を伴っており、中期以降の住居形態を示すものと思われる。営まれた時期は、出土遺物から加曽利Ｅ３式期と考えられる。



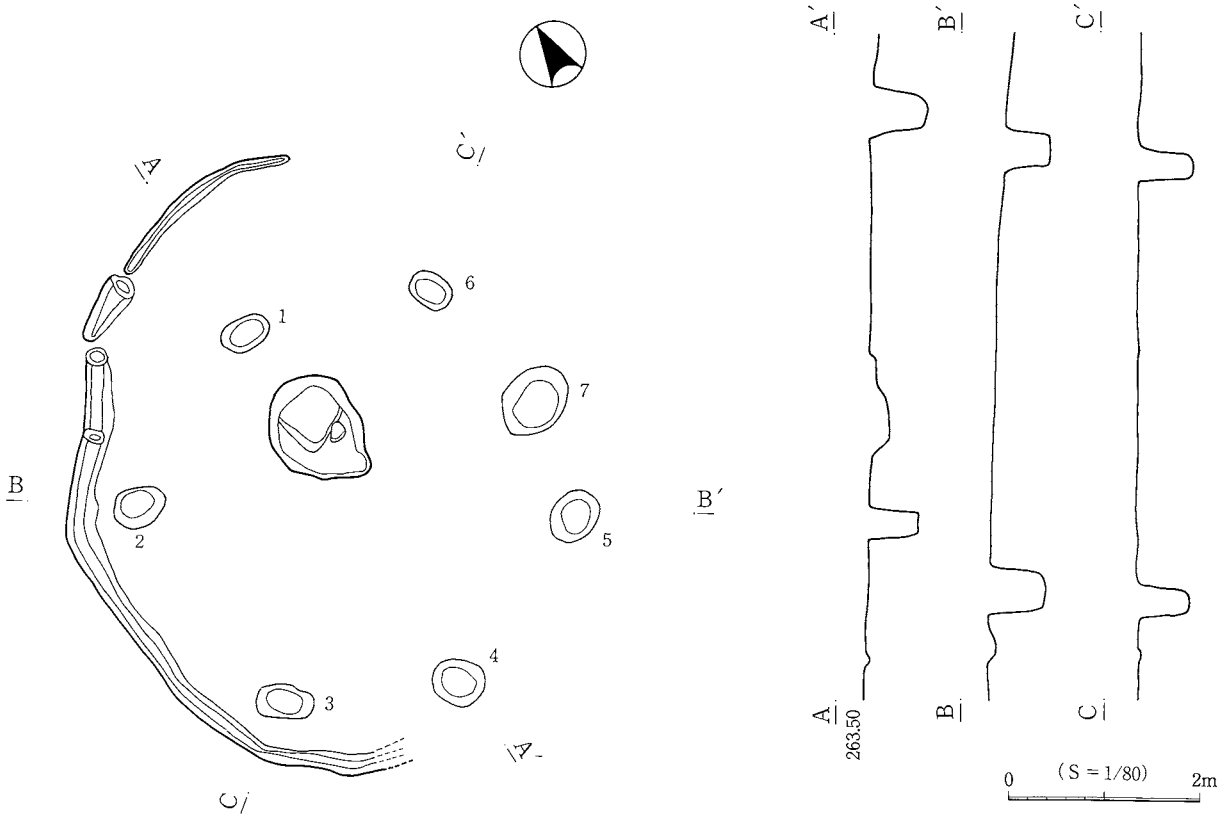
第７図　２号住居跡遺構・遺物図

3．5号住居跡

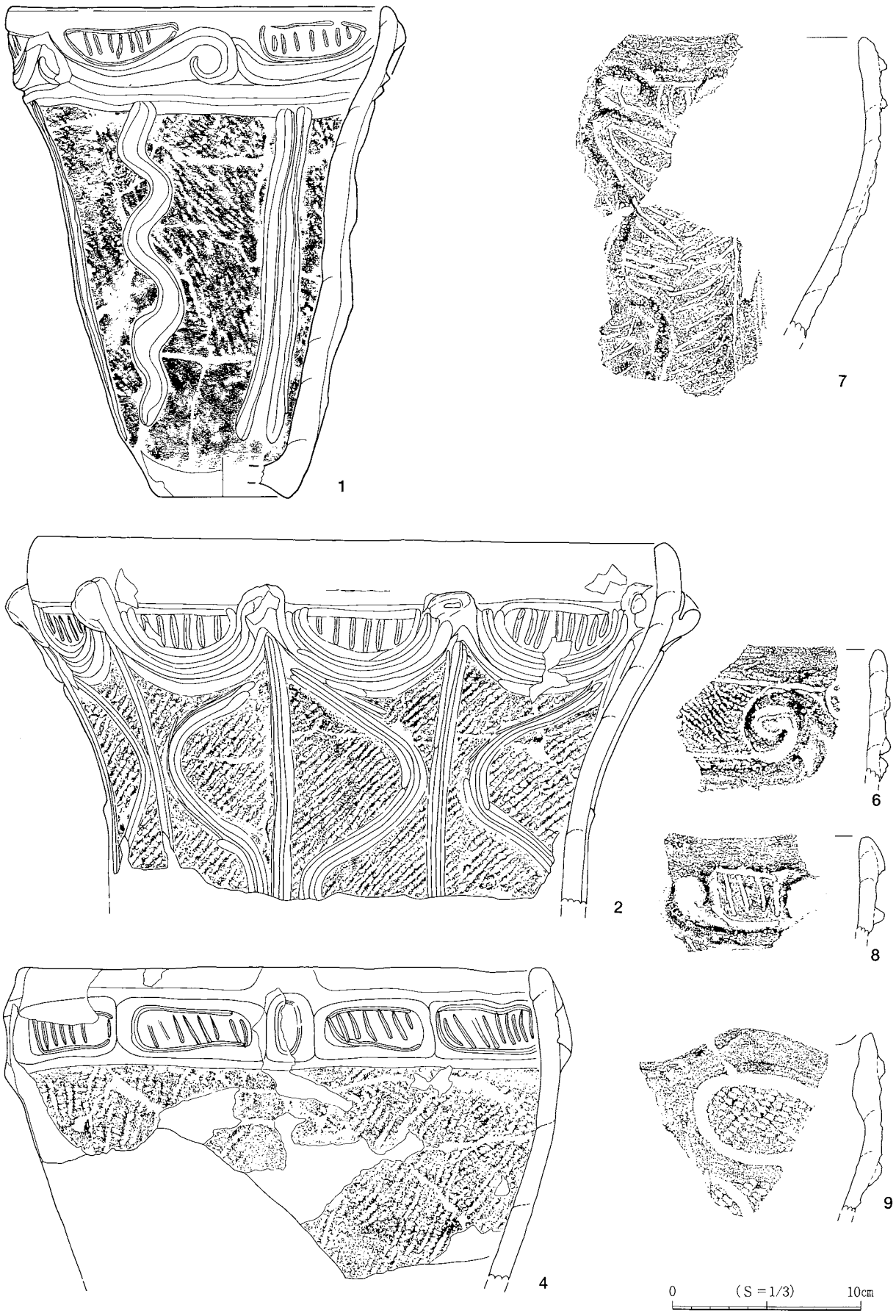
検出位置：X３－Y６～X３－Y７～X４－Y７～X４－Y６グリッドにまたがる。標高263.30ｍ／平面プラン：直径６ｍ以上のほぼ円形／覆土：暗褐色～黒褐色土／床面：ソフトローム面が硬くしまっていた。／炉跡：ほぼ中央に110cm×100cm、深さ10cm、不整形の掘り方、その中の北側に50cm四方、深さ10cmの炉本体を持つ。中に炭化粒子混じりの暗褐色土が充填される。／柱穴：６基検出、北側の柱穴は炉に寄る。50cm～80cm×34cm～60cmの不整形に近い楕円形、床面からの深さ60cm。／ピット：西側周溝内に小ピット３基検出。／周溝：西側壁寄りに平面プランの半分弱を巡る。幅20cm、深さ10cm／遺存状況：壁の立ち上りは検出されず、周溝の半分弱と柱穴・炉が残っているのみであった。

出土遺物：大型整理箱で２箱出土。土器は、いずれも曾利Ⅲ式を客体的要素とした加曽利Ｅ３式である。その特徴は１・２・４のように、口縁部の楕円もしくは舟形区画内に縄文でなく沈線を充填すること、頸部無文帯が喪失し、胴部に沈線もしくは隆線を垂下させているが、磨消縄文が施されず、胴部には他に蛇行する沈線もしくは隆線が垂下している点にある。また５のような典型的な曾利Ⅲ式、10のように沈線を多用した曾利式の影響の強い土器が出土している。

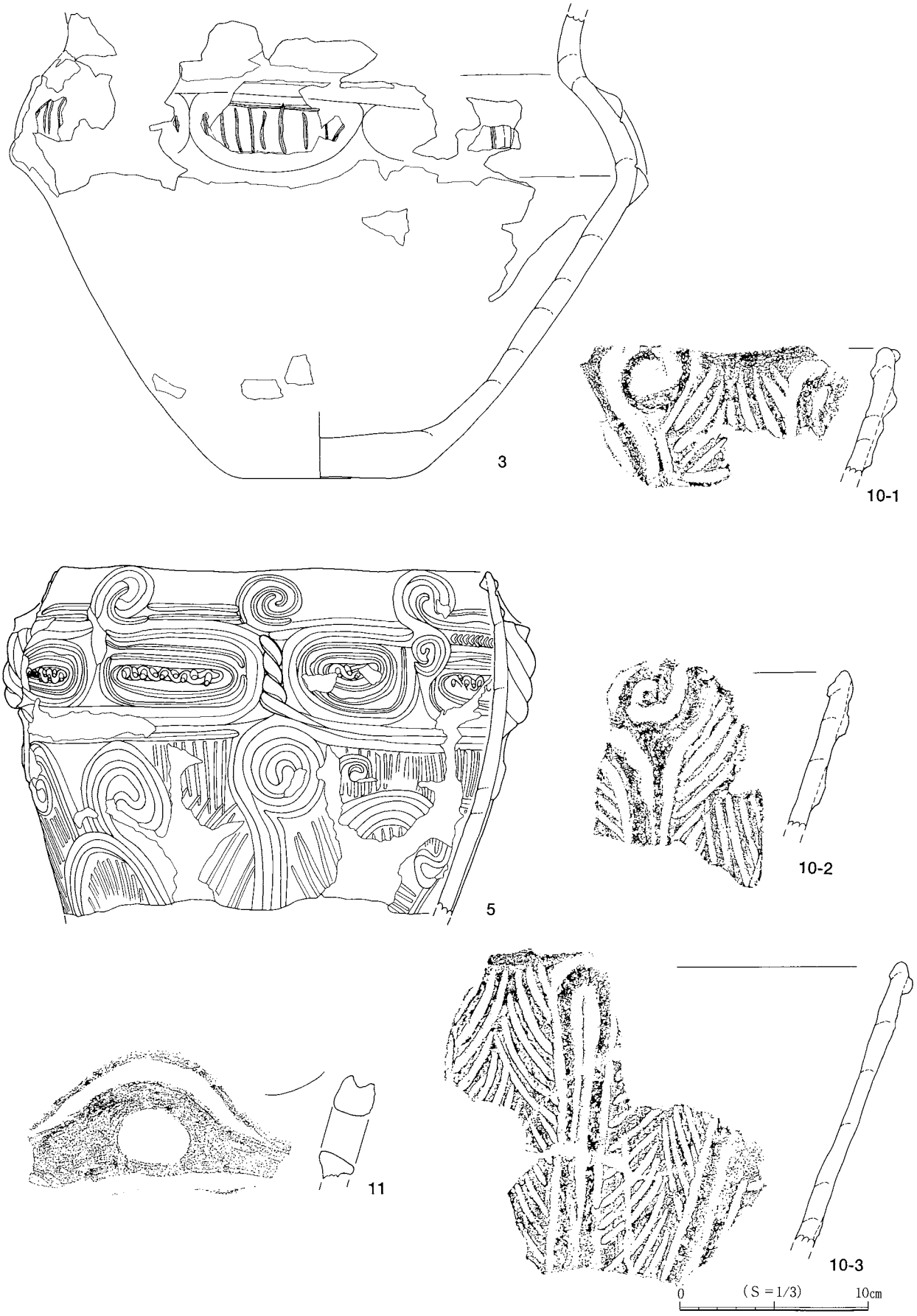
所見：検出時、確認面上に扁平な石が散乱しており、敷石住居とも考えられたが、その石よりも30～50cm下から土器等の遺物が出土、さらにその下から炉・柱穴・周溝が検出されたため、中期の円形住居と確認できた。営まれた時期は加曽利Ｅ３式期で、中部高地系である曾利Ⅲ式との並行関係および融合が見られる。２号住居跡に比べて、明らかに曾利式の影響を見てとれる資料である。



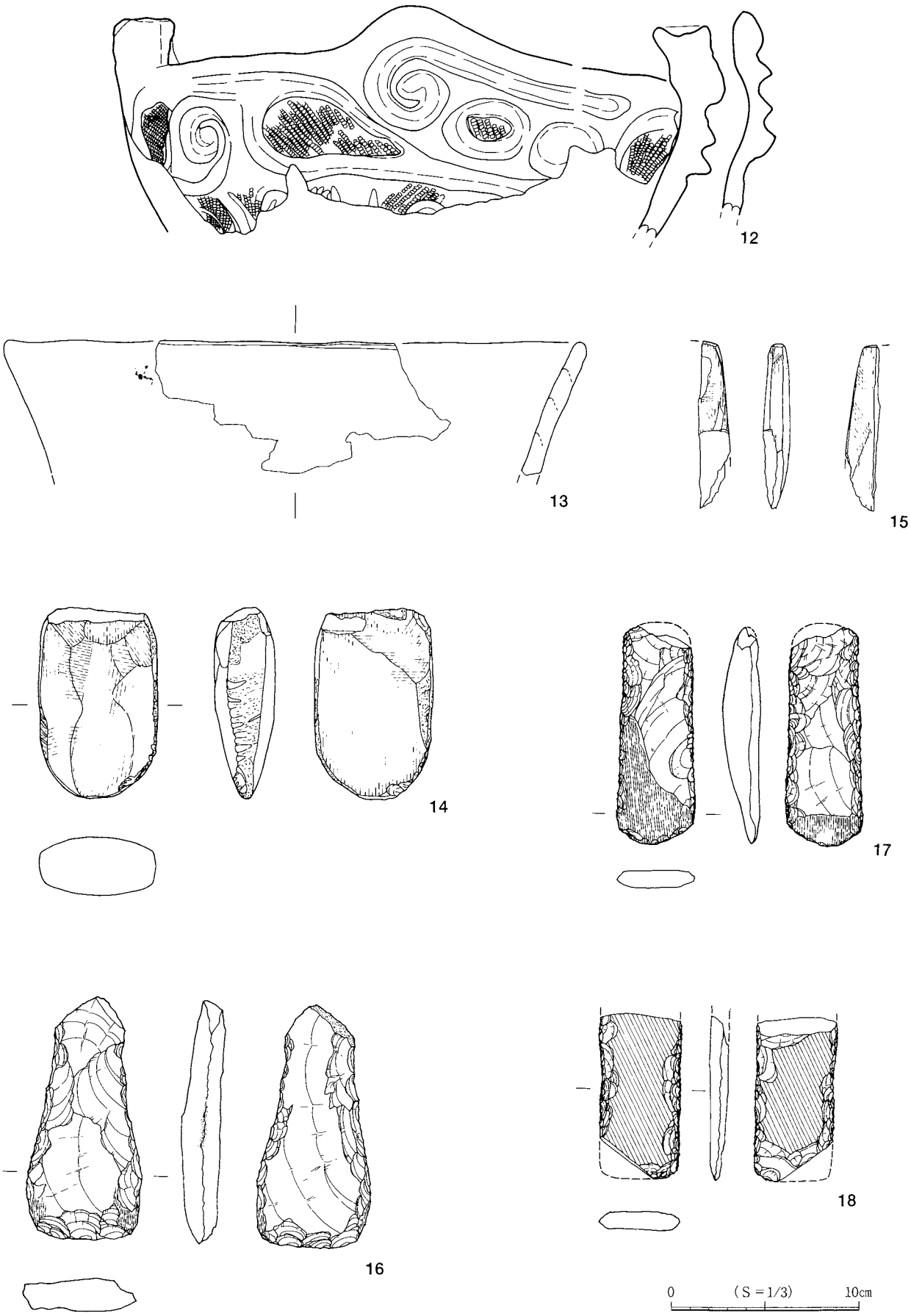
第８図　５号住居跡遺構図



第９図　５号住居跡出土遺物図（１）



第10図　5号住居跡出土遺物図（2）



第11図　5号住居跡出土遺物図（3）

4．１号土坑

検出位置：Ｘ２－Ｙ４グリッド、２号掘立柱建物跡中に検出、標高262.5ｍ／平面プラン：1.56ｍ×1.0ｍの楕円形／覆土：黒褐色／底面：ほぼ平坦

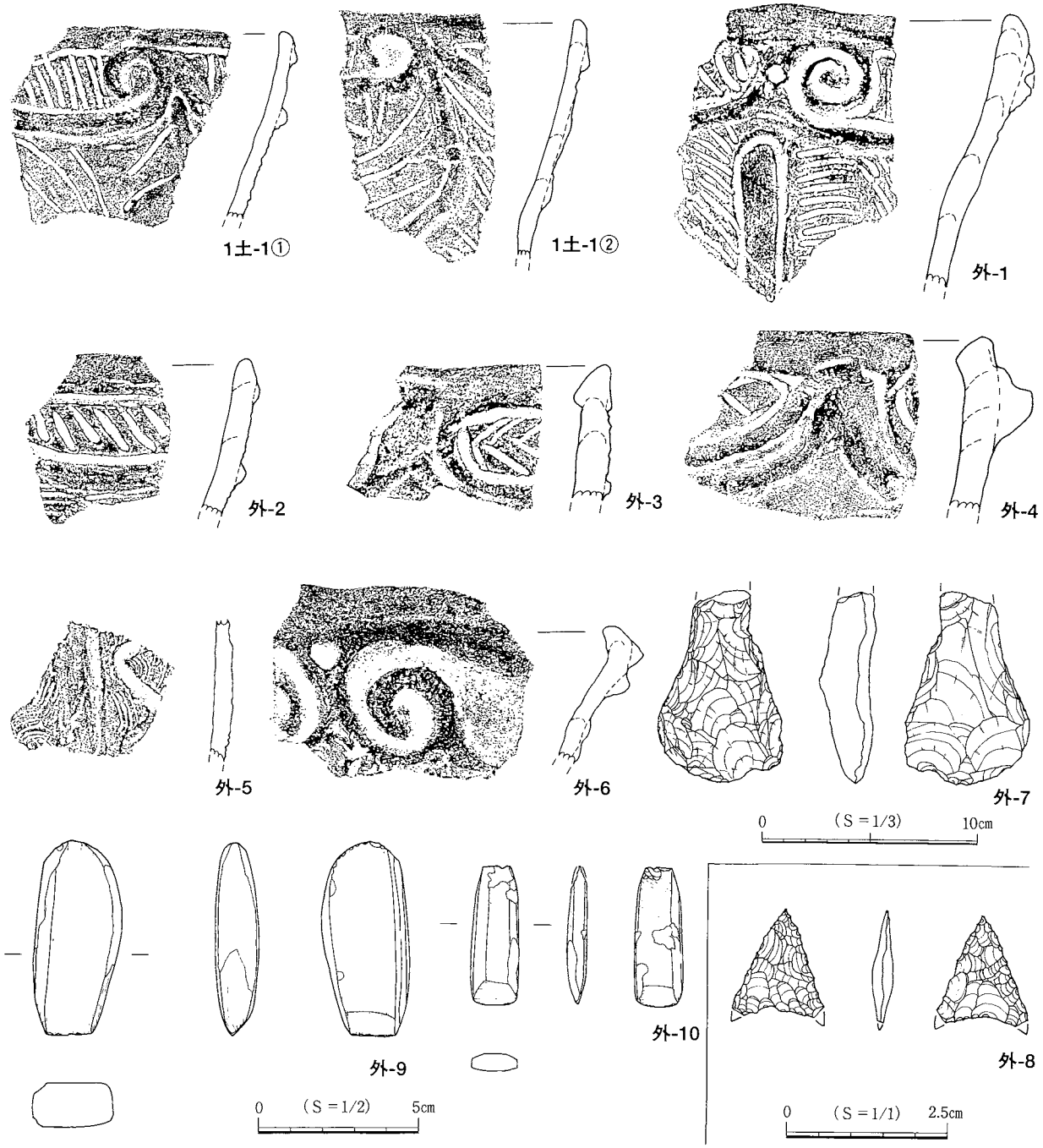
出土遺物：曾利Ⅲ式期に相当する土器が出土している。

所見：本遺跡で検出された土坑の中で唯一縄文時代の所産である。

5．遺構外出土遺物

縄文時代の遺構外出土遺物は、そのほとんどが調査区内東側に集中している。同時期の遺構も同じように東側に集中してる。

外－１～４は、１号住居跡南側のＸ４－Ｙ３～Ｘ５－Ｙ３グリッドで出土している。いわゆる曾利Ⅲ式期



第12図　縄文時代土坑・遺構外出土遺物図

に相当する。５号住居跡出土の７・８・10・11に相似しており、沈線を用いた綾杉文を特徴としている。

外－５～６は１号住居跡の北側、Ｘ５－Ｙ３グリッドで出土しており、加曽利Ｅ３式期に相当する。このうち外－６は試掘調査の際にトレンチ内より出土しており、同じトレンチ内に１号住居跡の石囲炉が検出されている。外－７～10の石器も１号住居跡の周辺で出土した。この他にも今回図示できなかった遺物の大部分は、１号住居跡の周辺からの出土である。これらの遺物は１号住居跡に伴う可能性もあるが、発掘調査の段階では確認できなかった。

このように遺構外出土遺物を見ると、そのほとんどが住居跡と同じ加曽利Ｅ３－曾利Ⅲ式期である。このことからも、極めて限定された時期に、小規模の集落もしくは単独の住居が営まれていた可能性が考えられる。

第２節　平安時代

この時期に相当する遺構は、掘立柱建物跡３棟、集石遺構１基、土坑１基および溝１条である。その分布状況は、１号掘立柱建物跡を除いて調査区の東側に集中する。遺構はいずれも浅間Ｂ軽石の下に掘り込まれているか、覆土中にＢ軽石が堆積していた。出土遺物は遺構に伴うものおよび遺構外のもの共に少なく、特に遺構外出土のものは細片しかないため、本報告書に図示できないような状況である。したがって本遺跡における当該期の様相は、縄文時代に比べ痕跡が希薄であるため、集落等のように大きく展開する可能性は低い。

１．１号掘立柱建物跡

検出位置：Ｘ７～８－Ｙ５～７グリッド、標高263.20ｍ／覆土：暗褐色土もしくは黒褐色土、一部Ｂ軽石の薄い堆積が見られた。

所見：試掘調査で掘立柱建物跡として検出されている。柱間距離が１～1.2ｍとばらつきがあることと、桁・梁の両方向とも柱穴が対応していない所があるため、２棟以上の重複も考えられる。また、掘り方が貧弱なため、掘立柱建物跡でない可能性も指摘される。時代においても中世ではないかとも考えられたが、覆土とわずかな遺物から一応平安時代とした。

２．２号掘立柱建物跡

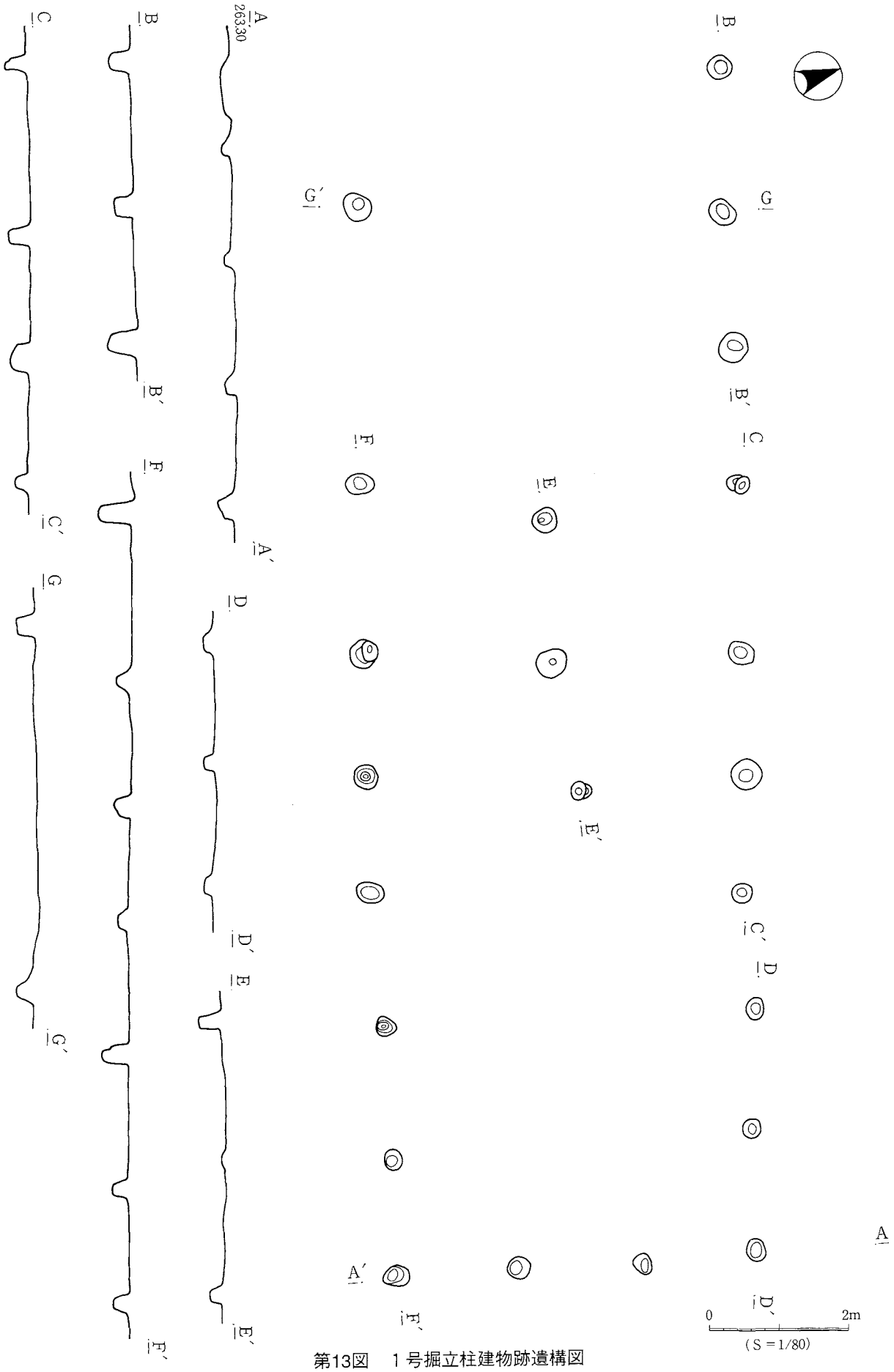
検出位置：Ｘ２－Ｙ４グリッド、標高262.40ｍ／平面プラン・規模：桁２間、梁２間、桁柱間2.1ｍ、梁柱間1.2ｍ、ピットは円形もしくは楕円形／断面：掘り込みの深さ20～30㎝／覆土：黒褐色もしくは暗褐色

所見：１号掘立柱建物跡同様、掘り方が貧弱な遺構である。

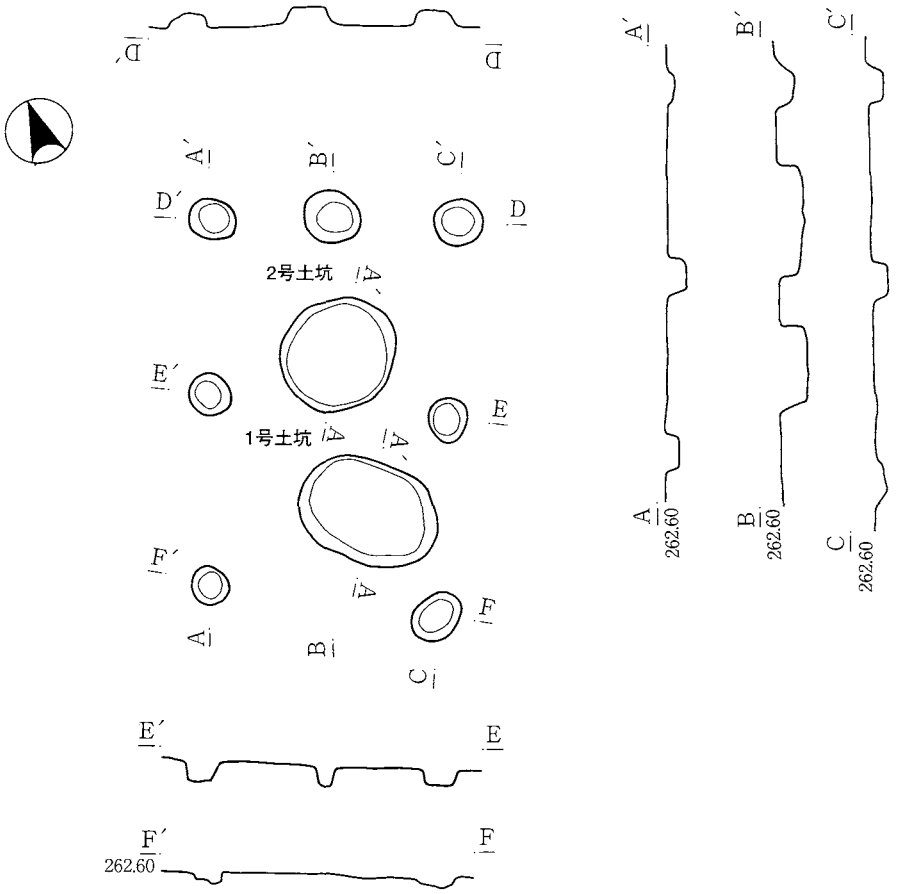
３．３号掘立柱建物跡

検出位置：Ｘ３－Ｙ４グリッド、標高262.70ｍ／平面プラン・規模：桁２間、梁１間、桁柱間2.4ｍ、梁柱間３ｍ、ピットは直径50～60㎝のほぼ円形／断面：掘り込みの深さ40～60㎝／覆土：黒褐色もしくは暗褐色

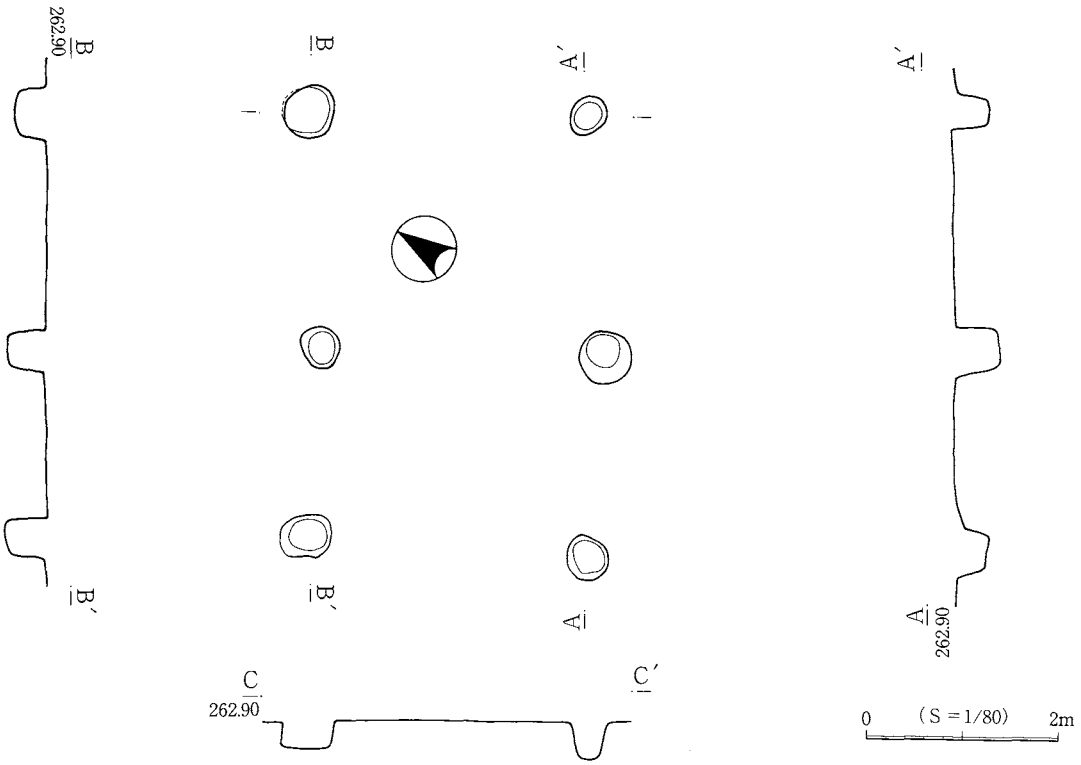
所見：先述した２棟と同様、掘り方が貧弱な遺構である。



第13図　1号掘立柱建物跡遺構図



第14図　2号掘立柱建物跡遺構図



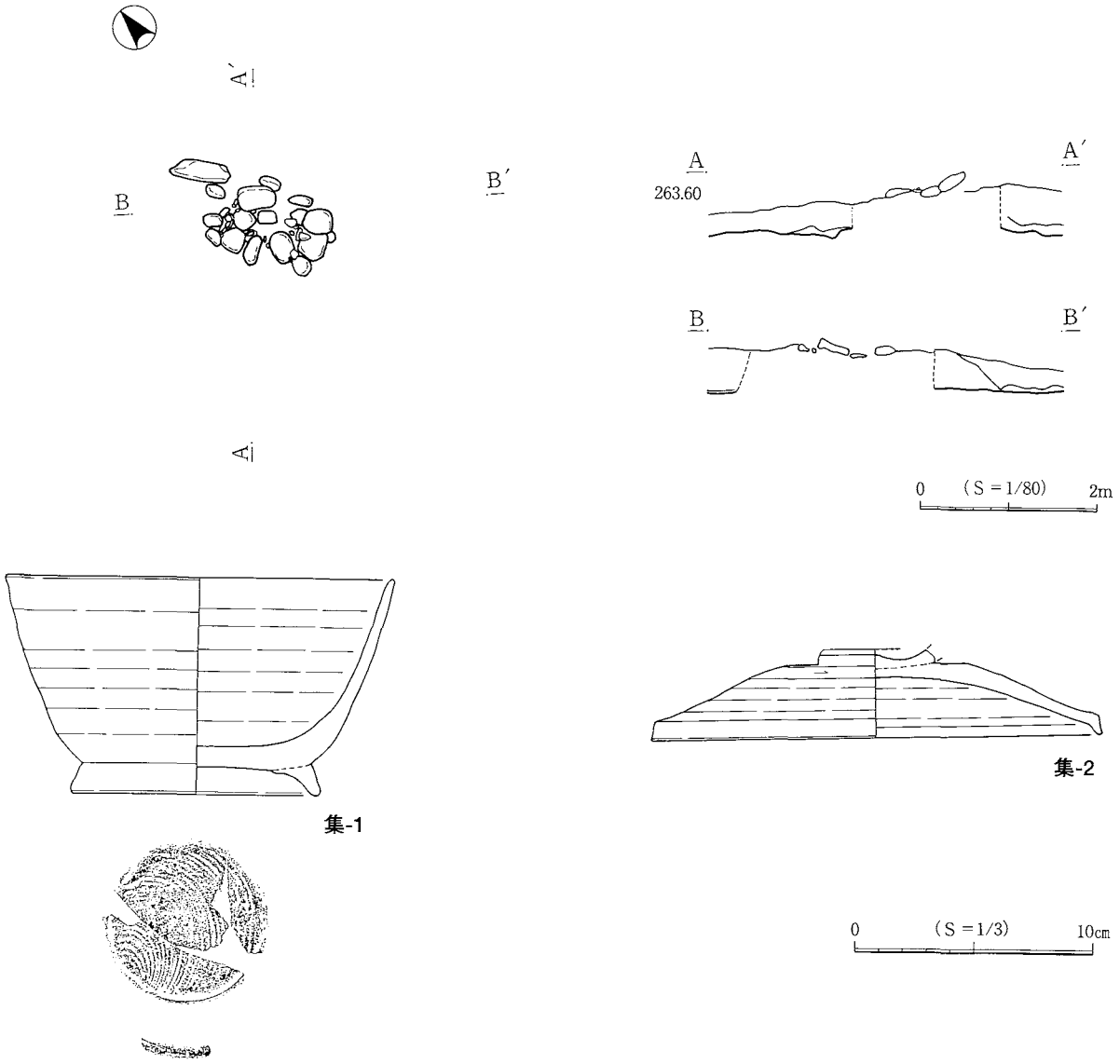
第15図　3号掘立柱建物跡遺構図

4．１号集石遺構

検出位置：Ｘ３－Ｙ６グリッド、標高263.5ｍ／平面プラン・規模：２ｍ×１ｍの長方形の範囲で検出／構築状況：浅間Ｂ軽石の下、暗褐色土（標準堆積第Ⅳ層）直上に扁平な川原石を用いて構築してある。石の配列は乱されており、どのように並べられていたかは不明である。

出土遺物：須恵器の坏と蓋が出土している。いずれも胎土中に細砂粒・白色粒・黒色粒・礫の混入が認められ、右回転ロクロ調整である。

所見：遺存状況が良くないため、検出状況から推測するしかないが、おそらく30～40cmくらいの石を並べて敷き、外側は60～70cmくらいの石を立てていたと考えられる。遺構の性格は、祭祀的な意味合いをもつ可能性が高いといえよう。営まれた時期は、出土遺物から10世紀中葉と考えられる。

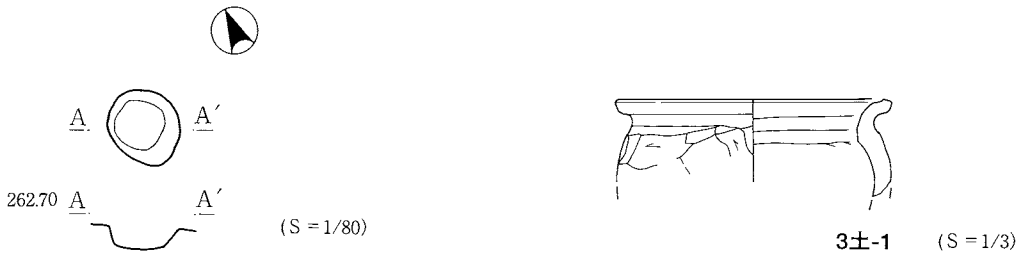


第16図　１号集石遺構・遺物図

5．３号土坑

検出位置：Ｘ３－Ｙ４グリッド、標高262.6ｍ／平面プラン・規模：直径80㎝の円形／断面：掘り込みの深さ20㎝／覆土：黒褐色／出土遺物：土師器の甕１点

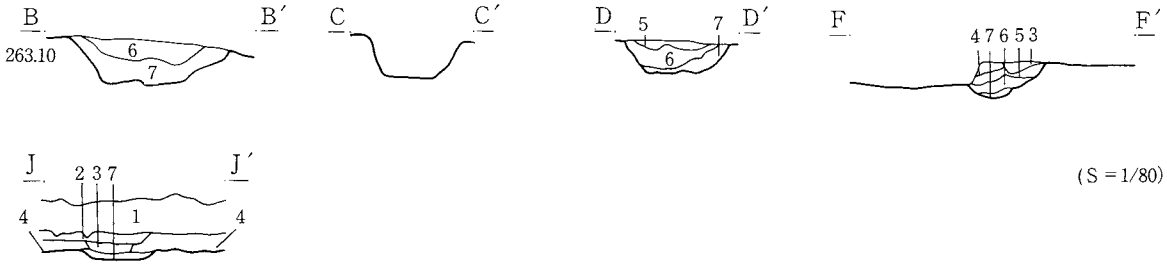
所見：出土遺物から10世紀と考えられる。



第17図　３号土坑遺構・遺物図

6．１号溝

検出位置：調査区東寄り、Ｘ１－Ｙ６グリッドからＸ６－Ｙ１グリッド、標高263.0～262.3ｍ／走行方向：南西から北東／検出した長さ：約67ｍ／掘り込みの深さ：60㎝／覆土：上層に浅間Ｂ軽石、下層に暗褐色もしくは黒褐色土／所見：検出された３条の溝状遺構の中で最も古い溝である。

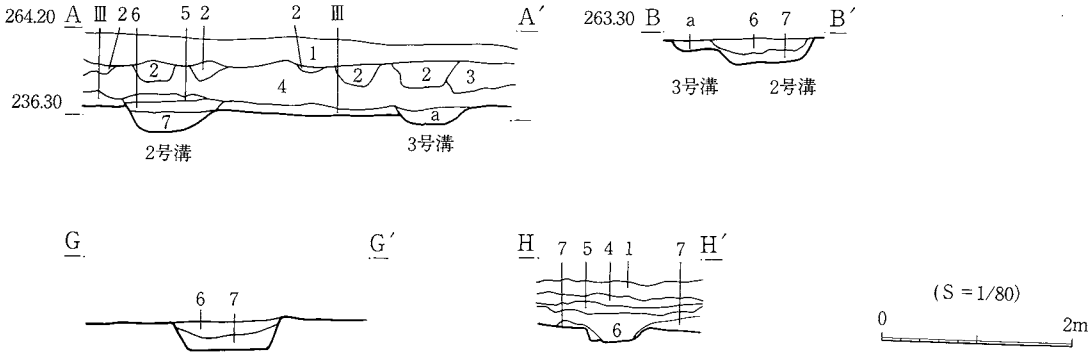


第18図　１号溝断面図

第３節　中・近世

1．２号溝・３号溝

検出位置：調査区北側、Ｘ６－Ｙ９グリッドからＸ５－Ｙ１グリッド、標高263.4ｍ～262.5ｍ／走行方向：北西から南東／所見：浅間Ｂ軽石降下以後、同Ａ軽石降下以前の溝状遺構である。



第19図　２号溝・３号溝断面図

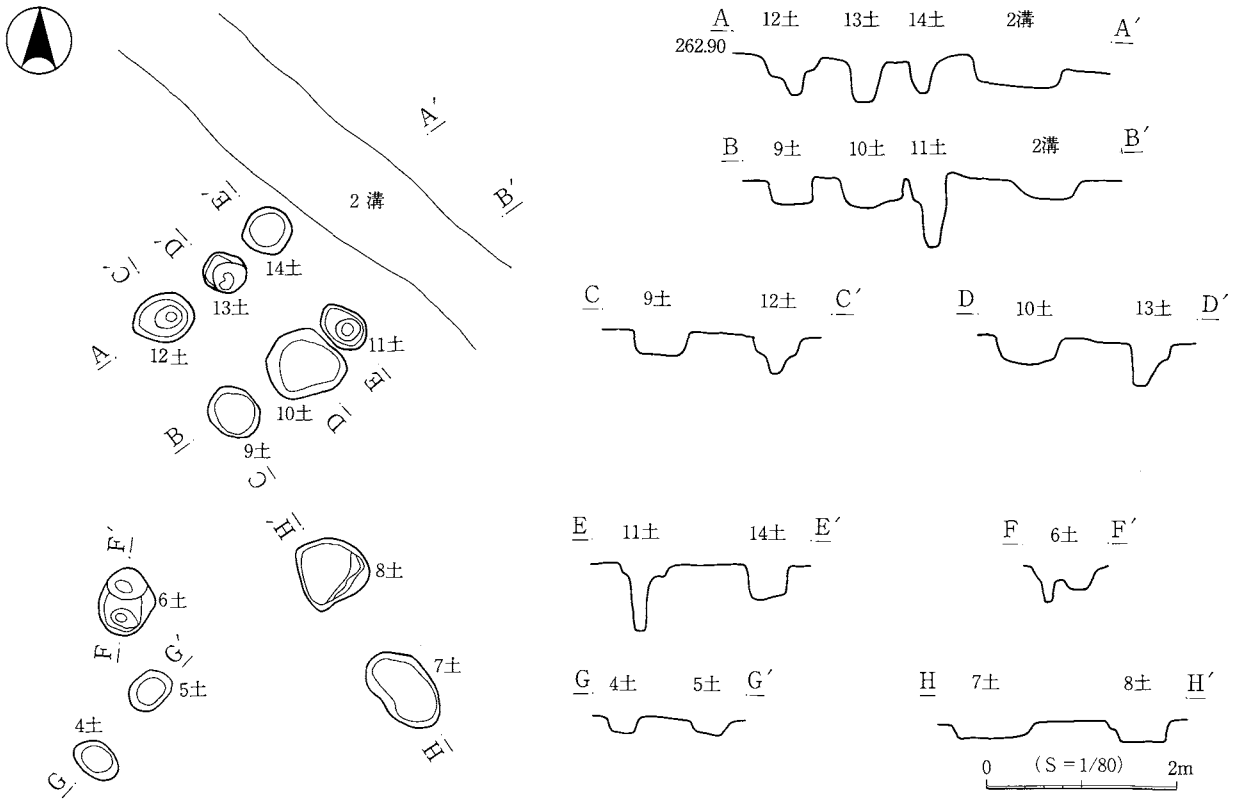
第４節　時期不明遺構

１．土坑

時期不明の土坑は12基で、いずれも出土遺物がなく、覆土中に軽石の堆積が見られない。したがって時期を確定するに至らなかった。検出された場所は調査区北東隅、１号溝の西側、２号溝の南側に集中する。

時期不明土坑一覧

２号土坑：位置＝Ｘ２－Ｙ４／標高＝262.4ｍ／平面プラン＝円　／平面規模＝直径120㎝　／深さ＝30㎝
４号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝楕円／平面規模＝50㎝×30㎝／深さ＝25㎝
５号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝楕円／平面規模＝50㎝×38㎝／深さ＝20㎝
６号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝不整／平面規模＝70㎝×60㎝／深さ＝40㎝
７号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ１／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝不整／平面規模＝98㎝×58㎝／深さ＝20㎝
８号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝不整／平面規模＝90㎝×80㎝／深さ＝20㎝
９号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝円　／平面規模＝直径50㎝　／深さ＝30㎝
10号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝不整／平面規模＝82㎝×70㎝／深さ＝40㎝
11号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝卵　／平面規模＝59㎝×41㎝／深さ＝82㎝
12号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝卵　／平面規模＝64㎝×46㎝／深さ＝41㎝
13号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝不整／平面規模＝42㎝×41㎝／深さ＝44㎝
14号土坑：位置＝Ｘ５－Ｙ２／標高＝262.7ｍ／平面プラン＝円　／平面規模＝直径56㎝　／深さ＝38㎝



第19図　時期不明土坑遺構図

表１　２号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	法　　量（cm）	特　徴（①胎土、②焼成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成整形、⑦文様）	備　考
1	深　　鉢	器高（24.0）	①細砂粒、白色粒②軟質③褐色～にぶい黄褐色④口縁部⑤波状口縁、波頂部は突起状に肥厚させる。⑦地文：縄文（LR）／他要素：沈線／構成・施文：口縁部文様帯は、横位の蕨手状文と楕円文を配置する。胴部は縄文施文後、沈線を垂下して無文帯（磨消縄文）を配置する。縄文帯に蛇行する沈線を垂下する。	加曽利Ｅ３
2	深　　鉢	底径7.6、器高（9.1）	①細砂粒②普通③褐色④底部⑦地文：縄文（LR）／他要素：沈線／構成・施文：縄文施文後、沈線間無文帯（磨消縄文）を配し、縄文部に蛇行する沈線を垂下する。	加曽利Ｅ３
3	深　　鉢	底径6.4、器高（3.7）	①砂粒、白色粒②普通③明褐色④底部⑦要素：沈線／構成・要素：体部下位まで沈線を垂下する	称名寺

表２　５号住居跡出土遺物観察表

番号	器　種	法　　量（cm）	特　徴（①胎土、②焼成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成整形、⑦文様）	備　考
1	深　　鉢	口径20.1、底径（7.0）、器高26.1	①細砂粒②普通③にぶい黄橙色～黒褐色④底部欠損⑤平縁⑦地文：縄文／他要素：隆帯・沈線／構成・施文：口縁部文様帯は隆帯を巡らして胴部と区分し、横位の蕨手状文を７単位連結する。船形状の区画内に縦沈線を充填する。胴部は２本一組の隆帯を垂下して３単位に区分し、蛇行する隆帯を配して、縄文を充填する。	加曽利Ｅ３
2	深　　鉢	口径35.3、器高（20.1）	①細砂粒、雲母②普通③明褐色～にぶい褐色④口縁部～胴部⑤平縁⑦地文：縄文（LR）／他要素：隆帯・沈線／構成・施文：口縁部直下に無文帯を持ち、２本の隆帯による連弧文を10単位配置する。連弧文の結合部は小渦巻状の突起となる。半円形の区画内は縦沈線を施す。胴部は縄文施文後、連結部より直線と蛇行する隆帯を垂下する。	加曽利Ｅ３
3	鉢	最大径（35.5）、底径10.0、器高（25.5）	①細砂粒②堅緻③にぶい黄橙色～黒褐色④頸部～底部１／２⑤頸部で強くくびれる。⑥胴部篦研磨⑦地文：沈線／他要素：隆帯／構成・施文：肩部に文様帯をもつ。隆帯で横位の区画文を配する。区画内は縦沈線を充填する。	加曽利Ｅ３
4	深　　鉢	口径29.0、器高（17.5）	①細・粗砂粒②普通③明褐色④口縁部～胴部⑤平縁⑦地文：縄文（RL）／他要素：隆帯・沈線／構成・施文：口縁部文様帯は、隆帯で横位の区画文を10単位配する。正面に円形文を施す。区画内は縦の沈線を充填、胴部は縄文を施文する。	加曽利Ｅ３
5	深　　鉢	口径23.8、器高（19.3）	①細砂粒②普通③褐色④口縁部～胴部⑤平縁、口縁部わずかに内湾する。口縁端部内側に稜をもつ⑦主要素：隆帯／他要素：沈線・刺突／構成・施文：口縁部文様帯は隆帯による区画を４単位配し、さらに区画内を区分する。区画の接合部にはねじりと渦巻の隆帯を施す。区画内は、沈線と刺突文で充填する。胴部は２本一組の隆帯による唐草文を施し、綾杉文を充填する。	曾利Ⅲ
6	深　　鉢	器高（7.0）	①砂粒・白色粒・軽石②普通③黒褐色④口縁部⑤平縁口縁⑦地文：縄文（RL）／他要素：隆帯・沈線／構成・施文：隆帯による横位のわらび手状文と区画内縄文を充填して口縁部文様帯を構成する。隆帯脇に細沈線をそえる。	加曽利Ｅ３
7	深　　鉢	器高（16.0）	①砂粒・白色粒②普通③明褐色～暗褐色④口縁部⑤平縁口縁⑦要素：隆帯・沈線／構成・施文：口縁部は隆帯による横位のわらび手状文を施し、区画内は縦位に沈線を充填する。胴部は隆帯による垂線と蛇行垂線を配し、粗い綾杉沈線文を充填する。	加曽利Ｅ３（曾利系）
8	深　　鉢	器高（5.3）	①砂粒・白色粒②普通③暗褐色④口縁部⑤平縁口縁⑦要素：隆帯・沈線／構成・施文：隆帯による横位のわらび手状文区画を施し、区画内を斜行沈線で充填する。	加曽利Ｅ３（曾利系）
9	深　　鉢	器高（9.6）	①砂粒・白色粒・輝石②普通③暗褐色④口縁部⑤波状口縁⑦地文：縄文（RL）／他要素：沈線・隆帯／構成・施文：隆帯と沈線によって口縁部に横位の区画文帯を配する。区画内は縄文を充填。	加曽利Ｅ３
10	深　　鉢	器高（15.3）	①砂粒・白色粒②軟質③明褐色～暗褐色④口縁部⑤平縁口縁、口縁端部内稜を持つ。⑦要素：隆帯・沈線／構成・施文：口縁部直下より、隆帯による逆Ｕ字文とわらび手状文を垂下して交互に配置し、綾杉文を充填する。	加曽利Ｅ３（曾利系）
11	深　　鉢	器高（5.5）	①砂粒・白色粒・輝石②普通③暗褐色④口縁部⑤波状口縁、波頂部に円形の貫通孔。⑦要素：沈線／構成・施文：波頂部口縁端肥厚して沈線を施す。	加曽利Ｅ３
12	深　　鉢	口径（31.8）、器高（12.4）、厚さ1.3	①砂粒・白色粒②普通③褐色～黒褐色④口縁部⑤波状口縁、山形突起と棒状突起が２単位ずつか？⑦地文：縄文（RL）／他要素：沈線／構成・施文：沈線による渦巻文・楕円区画文・横位のわらび手状文・逆Ｓ字文で口縁部文様帯を構成。胴部は縄文施文後２本の垂下する沈線区画内を磨消縄文による無文帯とする。縄文帯内にわらび手状沈線を垂下。	加曽利Ｅ３
13	深　　鉢	口径（30.8）、器高（7.0）	①細砂粒・白色粒・褐色鉱物粒・礫②普通③灰色④口縁部片⑤口縁部緩やかに外反、口縁端部が平坦部を作る。⑥内外面磨き調整⑦無文	
番号	器　種	法　　量	特　徴（①材質、②器形、③成型・調整、④使用痕、⑤その他）	
14	磨製石斧	長10.2cm、幅6.3cm、厚3.0cm	①緑色岩類、硬く緻密⑤欠損品再利用の未製品	
15	磨製石斧	長（5.9cm）、幅（1.0cm）、厚（1.0cm）	①泥岩、硬質⑤小型磨製石斧、頂部と側部の一部分のみ	
16	打製石斧	長13.0cm、幅6.1cm、厚2.1cm	①安山岩③裏面に大きく第１次剥離面を、頂部に自然面を残す。	
17	打製石斧	長（11.7cm）、幅4.2cm、厚2.0cm	①頁岩②短冊形⑤頂部の一部欠損	
18	打製石斧	長（8.7cm）、幅4.2cm、厚0.9cm	①粘板岩②短冊形⑤頂部および刃部の一部欠損	

表３　１号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	法　　量（cm）	特　徴（①胎土、②焼成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成整形、⑦文様）	備　考
1	深　　鉢	器高（11.0）	①砂粒、白色粒②普通③黒褐色④口縁部⑤平縁口縁⑦要素：隆帯・沈線／構成・施文：隆帯による横位のわらび手状文と区画内の縦位の沈線充填で口縁部文様帯を構成。胴部は口縁部文様帯より蛇行する隆線を垂下し、綾杉状に沈線を充填する。	加曽利Ｅ３（曾利系）

表４　遺構外出土縄文時代遺物観察表

番号	器　種	法　　量（cm）	特　徴（①胎土、②焼成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成整形、⑦文様）	備　考
1	深　　鉢	器高（12.7）	①砂粒・白色粒・輝石②普通③にぶい褐色④口縁部⑤平縁口縁⑦要素：隆帯・円形文・沈線／構成・施文：隆帯による横位のわらび手状文と区画内の縦位の沈線充填で口縁部文様帯を構成。胴部は逆Ｕ字形沈線を垂下して無文帯を配し、綾杉状に沈線を充填する。	加曽利Ｅ３（曾利系）
2	深　　鉢	器高（7.4）	①砂粒・輝石・白色粒②普通③暗褐色～明褐色④口縁部⑤口縁部は僅かに内湾する。⑦要素：沈線・隆帯／構成・施文：口縁部は隆帯で区画し、区画内は斜行沈線を充填。胴部は沈線を充填。	加曽利Ｅ３（曾利系）
3	大型の深鉢	器高（6.3）	①砂粒・白色粒・軽石②普通③にぶい褐色④口縁部⑤口縁部内側に肥厚する。⑦要素：沈線・隆帯／構成・施文：隆帯によって横位の楕円区画文を施す。区画内は沈線による綾杉文を充填する。胴部は蛇行隆帯を垂下する。	加曽利Ｅ３（曾利系）
4	大型の深鉢	器高（8.2）	①砂粒・白色粒②普通③橙色④口縁部⑤平縁口縁、口縁部内側に肥厚して稜をもつ。⑦要素：隆帯・沈線／構成・施文：２本の隆帯による連弧文と区画内に綾杉文を充填して、口縁部文様帯を構成する。	加曽利Ｅ３（曾利系）
5	深　　鉢	器高（6.6）	①砂粒・白色粒・輝石②軟質③暗褐色④胴部⑦要素：条線・沈線／構成・施文：条線を施文後沈線区画による無文帯を配し、条線帯には蛇行する沈線を垂下する。	加曽利Ｅ３
6	鉢	器高（6.4）	①砂粒・白色粒・輝石②普通③にぶい黄橙色④口縁部⑤口縁端部が内側に屈曲する。⑦主要素：隆帯／他要素：凹線／構成・施文：隆帯による渦巻文を主体とする区画文を配す。区画内は無文	加曽利Ｅ３
番号	器　種	法　　量	特　徴（①材質、②器形、③成型・調整、④使用痕、⑤その他）	加曽利Ｅ３
7	打製石斧	長（8.9cm）、幅5.8cm、厚2.3cm	①頁岩	
8	石　　鏃	長1.7cm、幅（1.4cm）、厚0.3cm	①黒曜石③打製	
9	磨製石斧	長6.0cm、幅2.7cm、厚1.3cm	①緑色岩類、硬質	
10	磨製石斧	長4.3cm、幅1.5cm、厚0.7cm	①緑色岩類、硬質	

表５　１号集石遺構出土遺物観察表

番号	器　種	法　　量（cm）	特　徴（①胎土、②焼成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成整形、⑦文様）	備　考
1	須恵器坏	口径（16.4）、底径（10.3）、器高9.1	①細砂粒・白色粒・礫・黒色鉱物粒②還元焔③灰色④口縁部～高台⑥ロクロ調整、底部右回転糸切り、高台貼り付け後ナデ調整。	
2	須恵器蓋	口径（18.9）、器高（3.7）	①細砂粒・白色粒・礫・黒色粒②還元焔③灰色④つまみ～口縁部⑤口縁端部立ち上がる。⑥ロクロ調整、天井部右回転切り離し後、回転ヘラケズリ調整。	

表６　３号土坑出土遺物観察表

番号	器　種	法　　量（cm）	特　徴（①胎土、②焼成、③色調、④残存、⑤器形、⑥成整形、⑦文様）	備　考
1	土師器小型甕	口径（10.7）、器高（3.2）	①細砂粒・白色粒・褐色鉱物粒②普通③明褐色④口縁部～胴部上半⑤口縁部くの字に外反する。⑥外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ調整。／内面：ヨコナデ調整。	

第５章　まとめ

１．本遺跡と周辺遺跡の関係について（特に段丘面の違いによる集落規模の違い）

本遺跡における今回の発掘調査によって、松井田町周辺の碓氷川下位河岸段丘面の縄文時代中期は、中位もしくは上位河岸段丘面に比較して、集落の規模がはるかに小さいか、もしくは単独の住居が単発的に営まれるのではないかというひとつの仮定をもつに至った。

中位もしくは上位河岸段丘には規模の大きな遺跡が存在することはすでに周知されており、特に本遺跡と同じ時期である縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ－曾利式期においては、最盛期を迎えるといってもいいような多くの遺構と遺物をもつ大集落－拠点集落的性格をもつ遺跡がいくつもある。しかしそれに対して下位河岸段丘においては、今までの発掘調査事例が少なかったこともあろうが集落と呼べる規模の遺跡がほとんど確認されておらず、その分布状況の違いは極めて明確になっている。

下位河岸段丘面に位置する本遺跡も、加曽利Ｅ３式－曾利Ⅲ式期という極めて限定された時期に集落というよりも単発的な住居跡を含めた規模の小さなものであった。今後本遺跡も含めて下位段丘と中・上位段丘との遺跡の性格の違いについて、とくに拠点集落とその周辺という観点から検討する必要性を感じる。

２．加曽利Ｅ３式と曾利Ⅲ式の共伴関係について（２号住居跡と５号住居跡の出土遺物から）

加曽利Ｅ３式は本遺跡の主体をなす時期であることは前にも述べた通りであるが、その文様構成を見ると大きく分けて二つのパターンが認識された。それは口縁部文様帯において顕著に現れる。ひとつは口縁部文様帯の楕円区画もしくは横Ｓ字内に単節の縄文が充填されている場合で、２号住居跡の１、５号住居跡の６・９・12である。これらの土器は胴部においても、垂下する２条の沈線の間が磨消縄文である。したがって口縁部の区画内に縄文を用いるものと、胴部の垂下する沈線および磨消縄文は一個体を構成する要素と考えることができる。この仮定によれば２号住居跡の２・３も範疇に入れてよいことになる。

それに対して他のひとつは、口縁部の楕円または船形の区画内に沈線を充填し、胴部には２条１組の隆線を垂下させ、または蛇行する隆線もしくは沈線を垂下させるものである。前者に比べてより立体的な文様構成である。５号住居跡の出土遺物の主体はこのタイプで１・２・４・８が相当する。

このような違いはどこに起因するのであろうか。それは前者のタイプを主とする２号住居跡と、後者のタイプを主とする５号住居跡の出土遺物を比較するとひとつの答が見えてくる。２号住居跡は図示しなかった遺物も含めて胴部には全く隆線を垂下させておらず、いわゆる曾利Ⅲ式の遺物も全く見られなかった。これに対して５号住居跡は、３・５・７・10のような曾利Ⅲ式の遺物が共伴しており、いずれも隆線と沈線を多用した立体的装飾に富む文様をもつ。したがって後者のタイプは加曽利Ｅ３式を主体として客体的に曾利Ⅲ式の要素が融合している可能性が考えられる。

３．おわりに

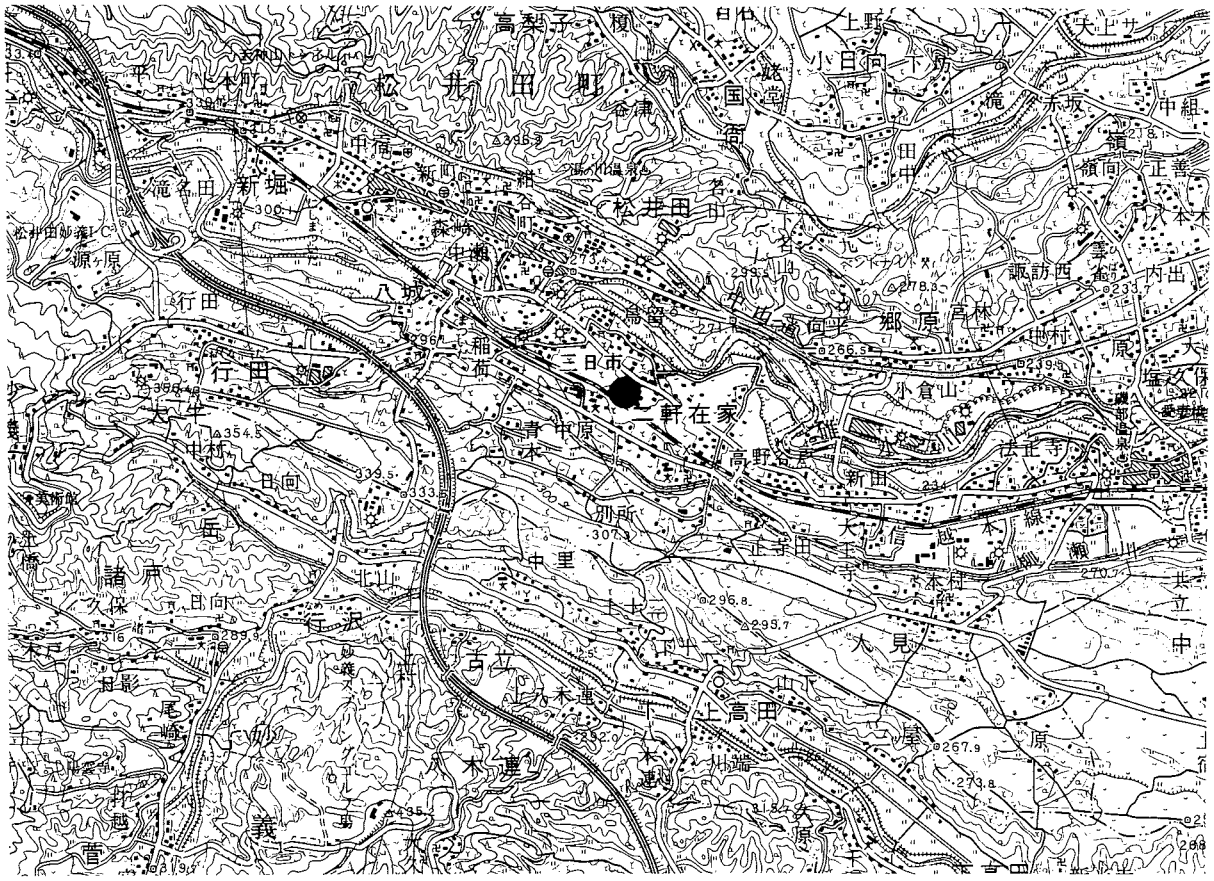
本遺跡は遺構・遺物の数が調査面積に対して少ない遺跡であった。しかしそこで提示された問題は、決して軽く見逃すことのできないものである。今後も周辺で開発がなされることに伴い、大小さまざまの発掘調査が行われることになる。

抄　　録

フリガナ	ニケンザイケトウコウジイセキ
書名	二軒在家東光寺遺跡
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松井田町埋蔵文化財調査会報告書
シリーズ番号	〈6〉
編著者名	小村　正之
編集機関	山武考古学研究所／〒286　千葉県成田市並木町221番地　☎0476－24－0536
発行機関	松井田町埋蔵文化財調査会／〒379-02　群馬県碓井郡松井田町新堀２４５番地（教育委員会内）☎0273-93-1111）
発行年月日	1997年３月21日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（フリガナ）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
二軒在家東光寺遺跡（ニケンザイケトウコウジイセキ）	群馬県碓氷郡松井田町大字二軒在家字東光寺686-1他（グンマケンウスイグンマツイダマチ オオアザニケンザイケアザトウコウジ）	10448		36°18′04″	138°48′48″	19960116 19960212	3,750㎡	宅地造成

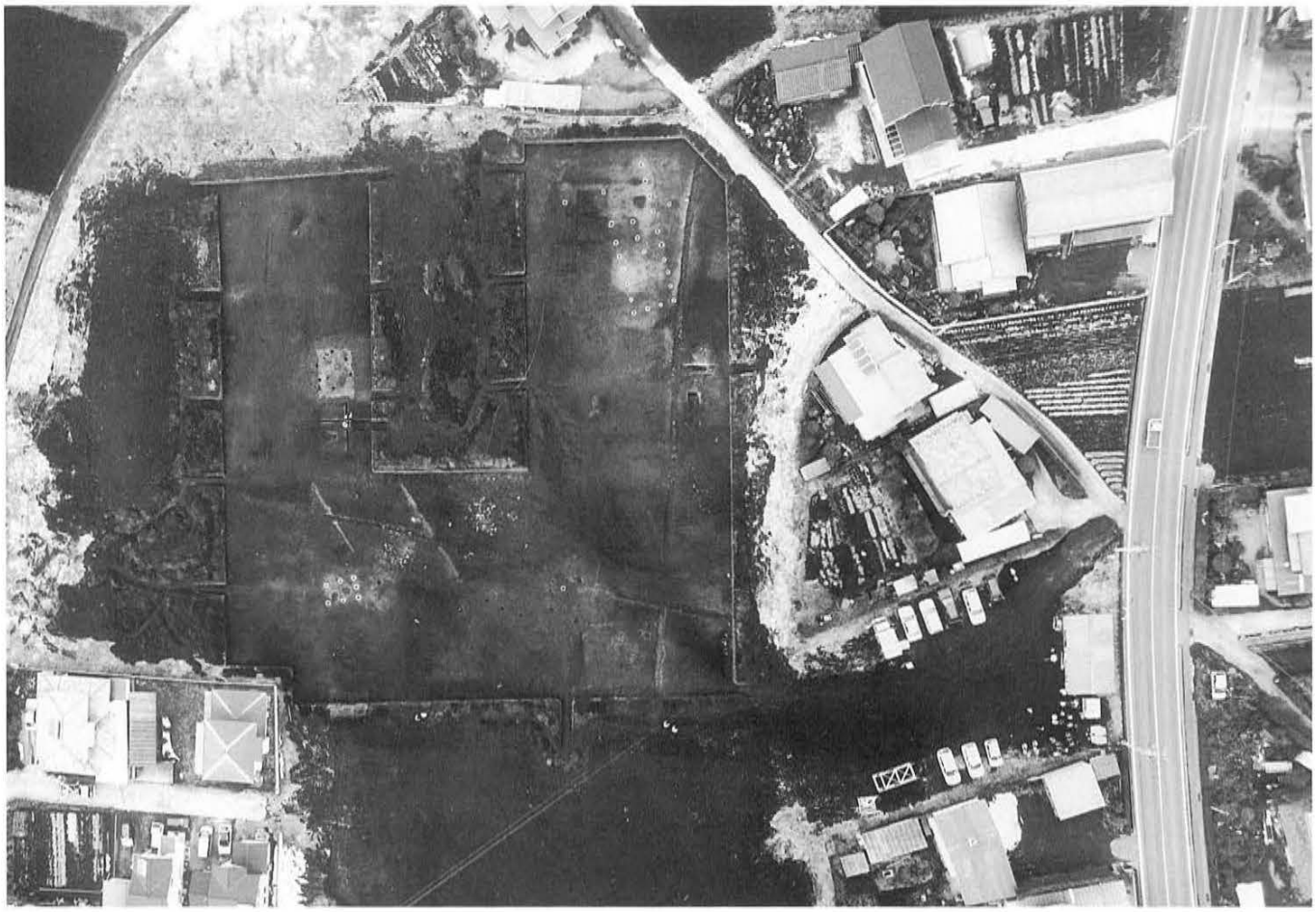
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
二軒在家東光寺遺跡	集落他	縄文	竪穴式住居跡　３軒 土坑　１基	縄文土器：縄文中期後葉（加曽利Ｅ３式・曽利Ⅲ式）
		平安	掘立柱建物跡　３棟 集石遺構　１基 溝状遺構　１条 土坑　１基	石器：打製石斧・磨製石斧・石鏃 土師器：小型甕 須恵器：坏・蓋
		時期不明	土坑　12基 溝状遺構　２条	



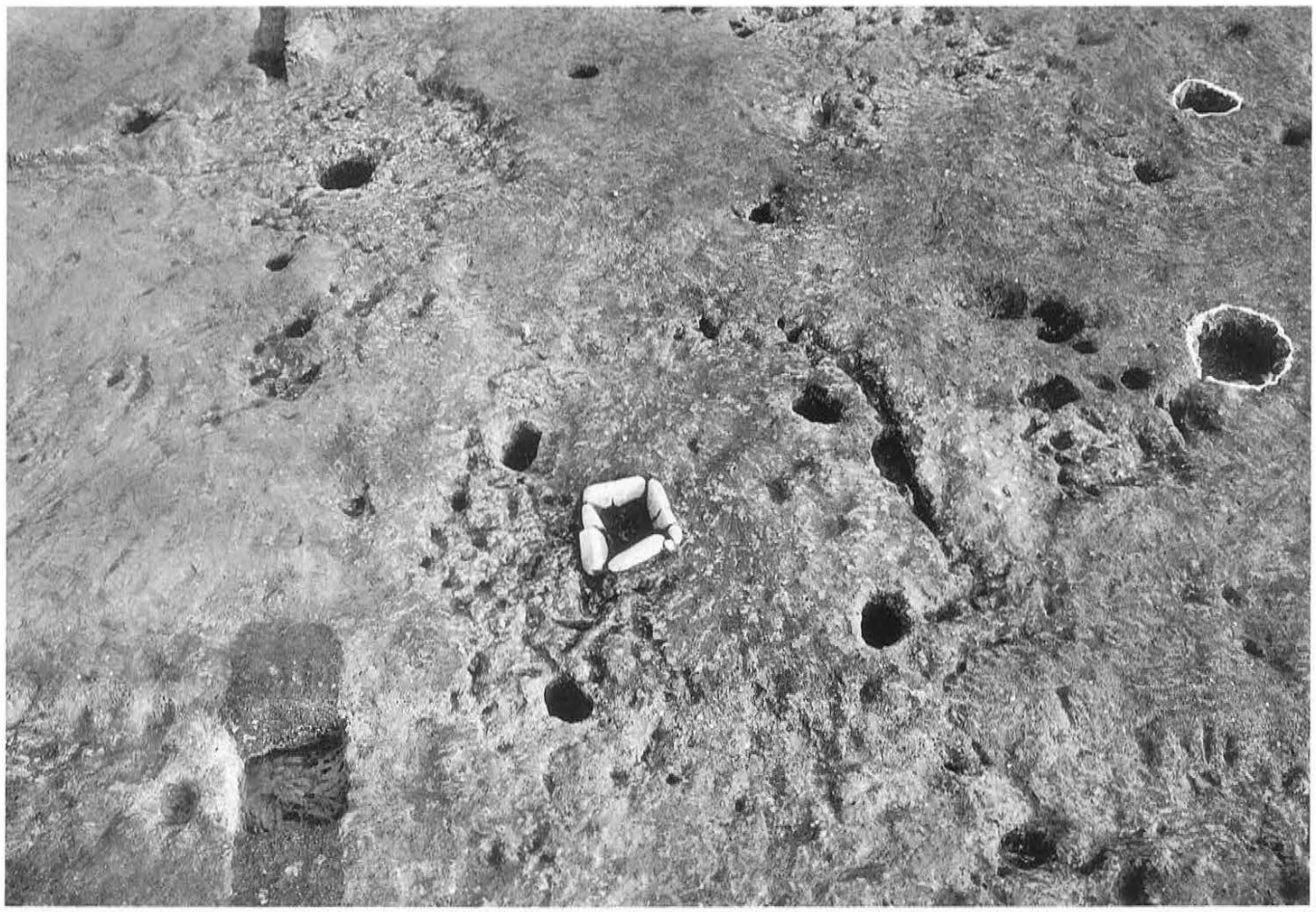
抄録図　二軒在家東光寺遺跡位置図（Ｓ＝１／50,000）

1．遺跡周辺全景（空撮）

図版２



１．調査区全景（空撮）



２．１号住居跡完掘全景

1．2号住居跡完掘全景

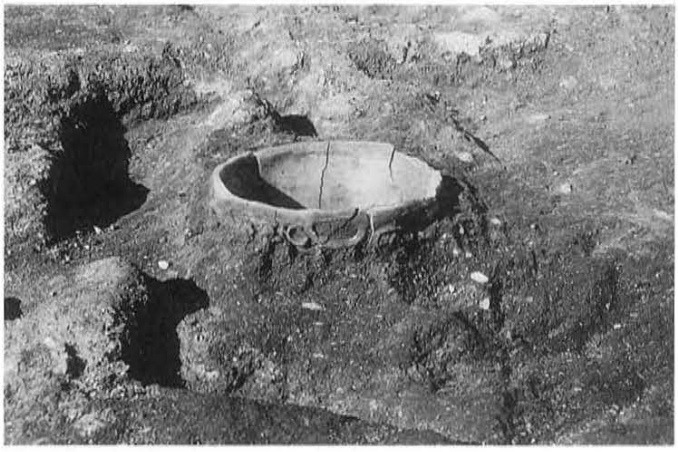
2．5号住居跡完掘全景

図版 4

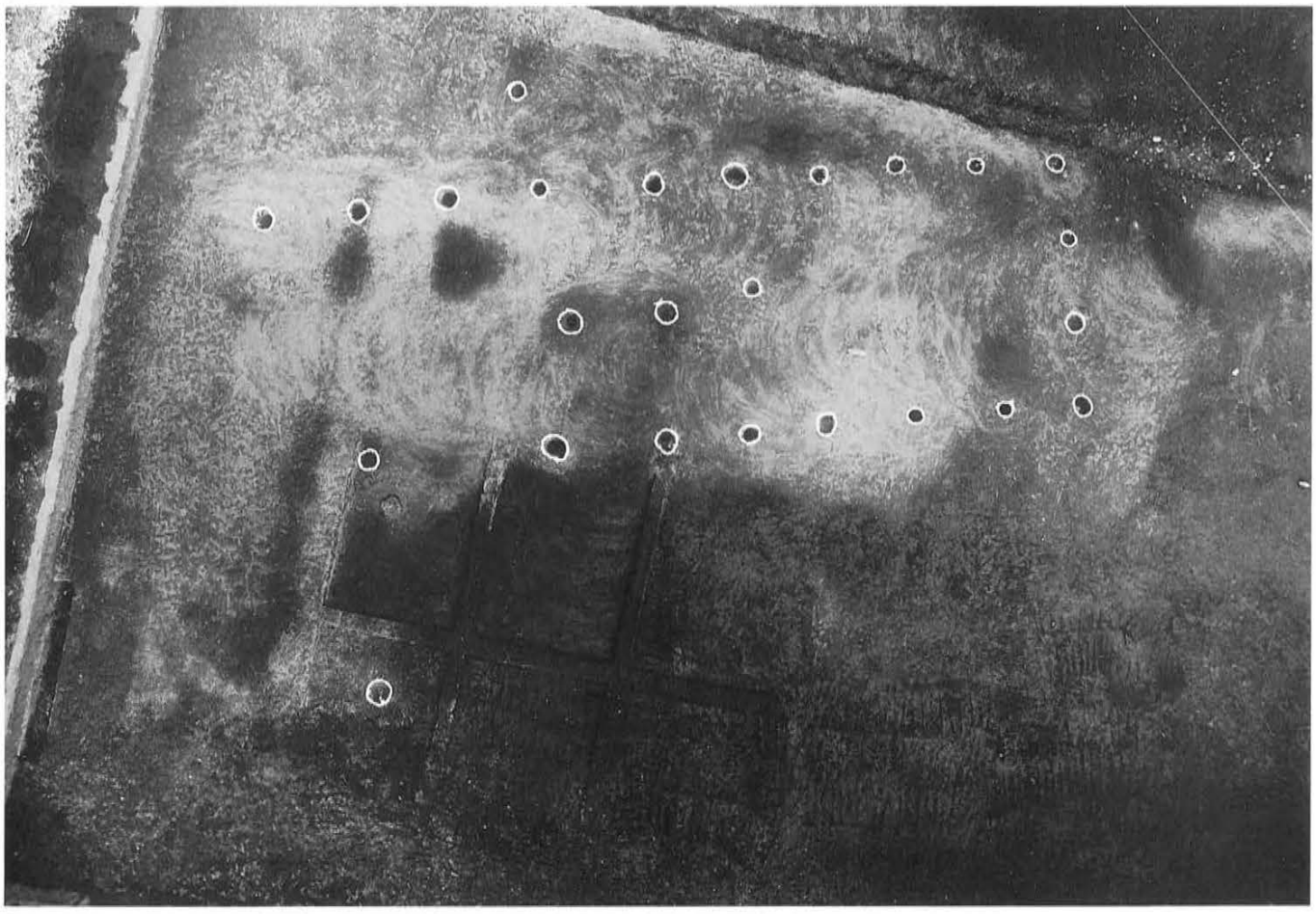
1．5号住居跡遺物出土状況全景

2．5号住居跡遺物出土状況

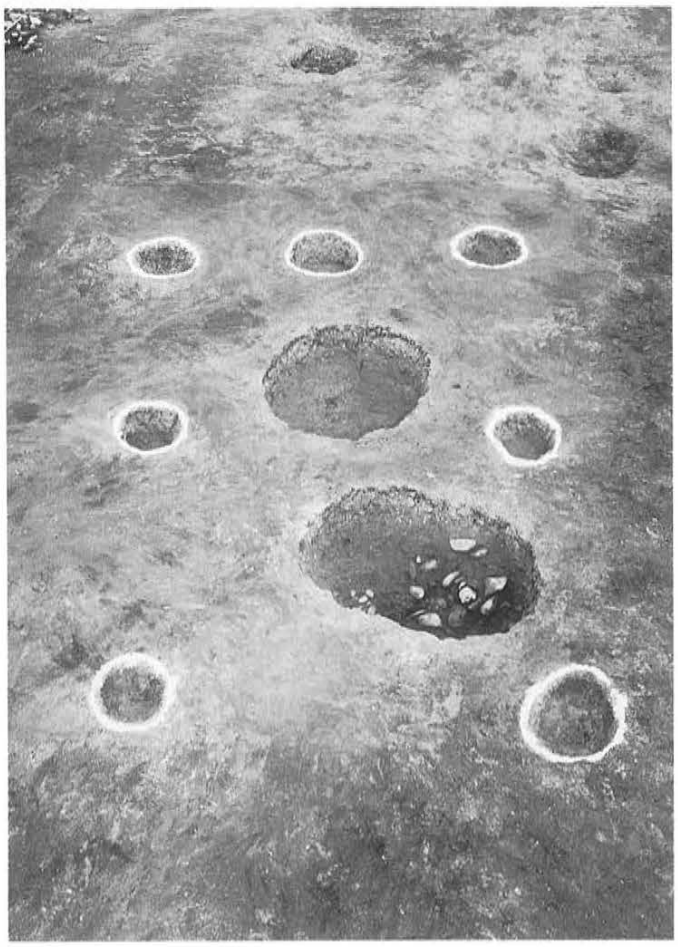
3．5号住居跡遺物出土状況



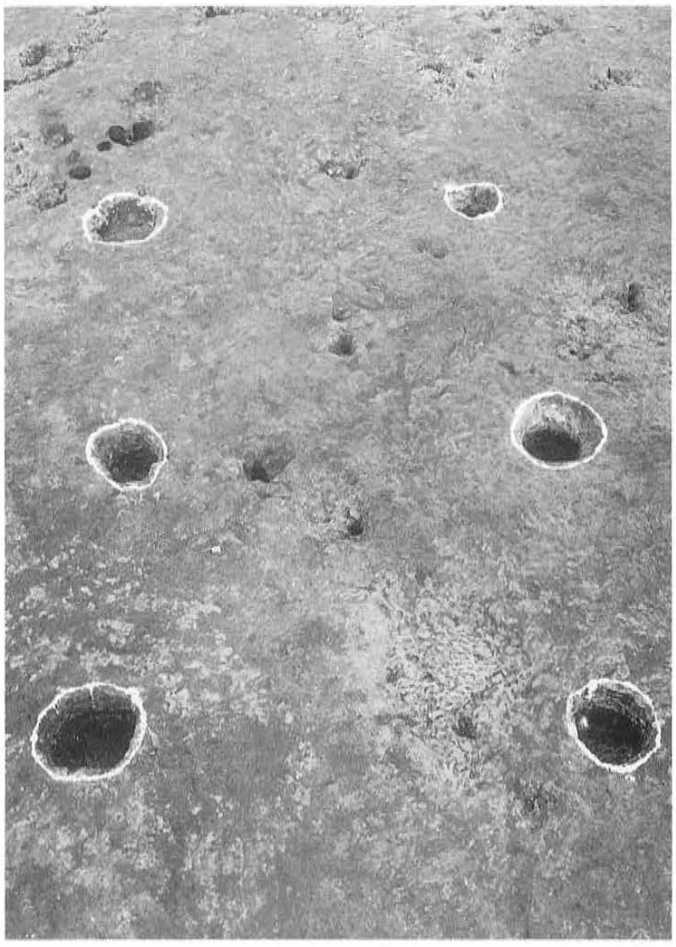
4．5号住居跡遺物出土状況



5．1号掘立柱建物跡完掘全景（空撮）



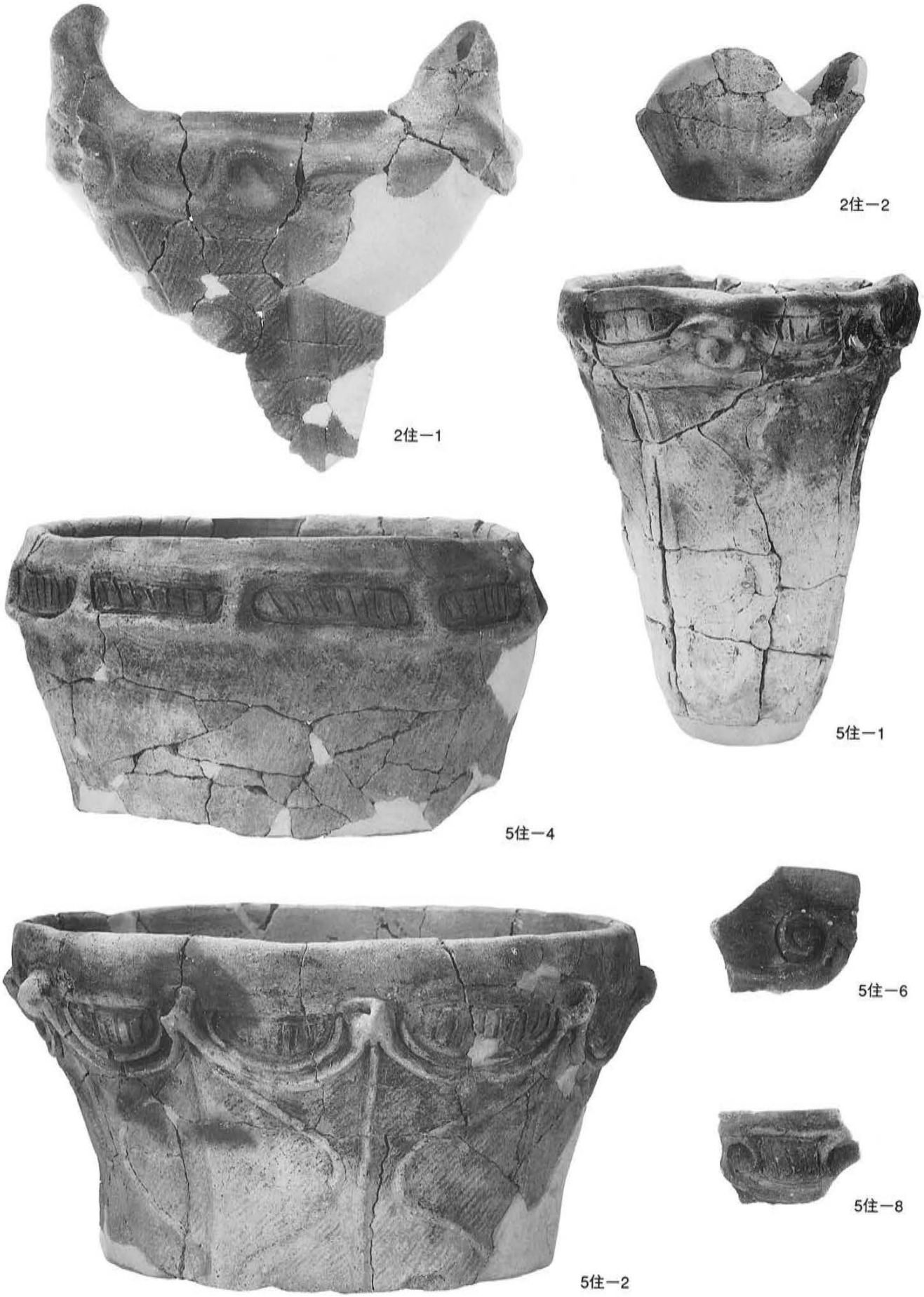
1．2号掘立柱建物跡完掘全景



2．3号掘立柱建物跡完掘全景

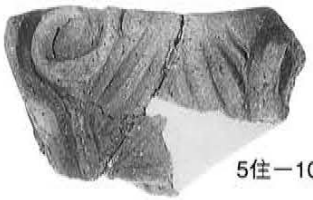
3．1号集石遺構全景

図版 6



2号住居跡・5号住居跡出土遺物（1）

5住－3



5住－10①

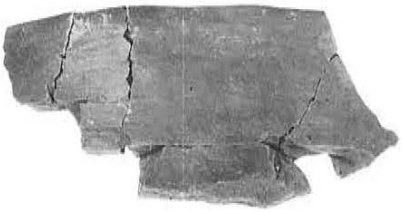
5住－10②

5住－10③

5住－9

5住－11

5住－5



5住－13

5号住居跡出土遺物（2）

図版 8

5住－12

5住－7

5住－14

5住－15

5住－16

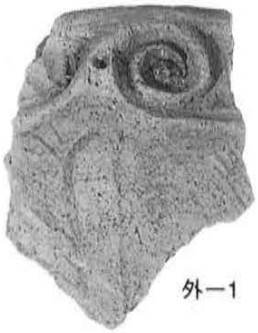
5住－17

5住－18

5号住居出土遺物

1土－1①

1土－1②


外－1

外－2

外－3

外－4

外－5

外－7

外－6

外－8

外－9

外－10

3土－1

集－1

集－2

土坑・遺構外・集石遺構出土遺物

松井田町埋蔵文化財調査会報告書〈6〉

二軒在家東光寺遺跡

印刷　平成9年3月20日
発行　平成9年3月21日

編集　山武考古学研究所
発行　松井田町埋蔵文化財調査会
印刷　㈱文化総合企画